# 三易由來記

下

日仕12
864
ゑ止

門口右13
號264
卷3

京都帝國大學圖書

# 三易由來記卷之下

大壑　平篤胤撰述　門人　駿河國　新庄道雄
武藏國　碧川好尚　同
常陸國　竹來道彦　校

明治三十九年一月廿七日
市橋俊吉氏寄贈

九

孔子晩而喜易序彖繫象說卦文言讀易韋編三絶曰假我數年若是我於易則彬彬矣。

此第九條も史記は孔子世家ゟ採り。抑孔子は晩而喜易少し云ふ說も。儒者の嫌ふ事ゟ思ひ合せ。所〳〵事少しも有ひ。其も先幼ゟひ好ゑる。禮容は事多問はむと。周ゟ適ゆて。老子の門ゟ入ゐるは。莊子天運篇

ゟ。孔子行年五十一。而見老聃と有ル時ゟ也。孔子の老子ゟ入門せる年頃を、或ハ十七歳の時と云へ、孔説ハ有ル所ゟ依ヨリて、史記の索隱ゟ孔子適周訪礼之時、豈柱下史耶。且孔子見老聃云、甚矣道之難行也。此非十七之人語也。乃既任之後、言耳と云へ、孔を信然る訳ゟり。史記の老子傳ゟ。其時ゟ事を載して。老子曰、子所言其人與骨皆已朽矣。獨其言在耳。去子之驕氣與多欲。態色與淫志。是皆無益於子之身。吾所以告子若是而已。少し誨ふ孔ゟ。孔子甚く畏感ぬる事あるゟ。

葛洪神仙傳ゟ。其事を記せる次ゟ。孔子讀書。老子見而問之曰。何書曰易也。聖人亦讀之乎。老子曰。聖人讀之可也。汝曷為讀之。と叱れる事も有ル。老子かく、孔子の易を讀ゐを叱るは徒ら得悟ゟ所ゟ非ず。聖ゟ能ハ人ゐそ。其深理を知ると。能と憤せしめ。かゝる其驕氣を抑ゆむ也の教術ゟり。然ルとも後ゟて。其旨をも云ゐ諭せゟ。そは礼記ゟ。家語ゟれども。老子ゟ聞ゐる由ゟて。孔子ゟ易理を語ゟ事も。往々所見ゟるゟて知ゟ。ゟ論語ゟ孔子ゟ自語ゟ。加我数年。五十以学易可以無大過矣と云へ。ゟ事あゟ。五十未満の。いまゟ易ゟ義理を。能く會得せざゟ頃ゟ語ゟるゟ。思し合せて所知ゟ多ゟり。

條ありて。此語を引まて。故知孔子之言易不以為卜筮之書而以為義理之書。儻使之卜筮之書耶。則分掛揲帰之法。固不待假数年而学也。蓋日中則昃。月盈則虧。此理之常也。故易之為教。貴謙冲而戒盈滿。喜中正而忌亢極。所以謂之学也。然當時未甚盛行。不叱詩書執礼之可雅言也。故假之数年。領會其教。則應事接物。豈有悔尤之至。此所以為無大過也。然則今日為易者。當據夫子之言。以為義理之書可矣。と云ゟ。此も通解の説ゟも記せゟる説ゟり。斯て同書ゟ。十有五歳ゟゟ学ゟ志して。次々ゟ上達せゟ事を云ゟて。五十而知天命と云へゟ。此齢

みして創めて易を学ぶ。其易学ハカを頼まて。天命を知る義ハ分るなし著し。其を本編に記ル如く。天命を知ちと。易學の本旨なるべき分り。此語の解を。朱熹も既く。天命ハ即天道之流行而賦於物者乃事物所以當然之故也。知此則知極其精而不惑。まと易緯坤鑿度ハ。孔子魯人生不知易。偶筮其命得旅。謙益於商瞿氏。曰子有聖智而無位。孔子泣而曰。天也。命也。鳳鳥不來。河無図。至嗚呼天命之也。嘆訖而後停讀禮。止史削。五十究易作十翼也。言。其易法を。師於姫昌。法旦とも見えあり。此全書を。武英殿の聚珍板と云ふ。なり出し。首に其提要ありて云へ。なり如く。晩くせ。顕はしこれ書。分がち。偶筮其命此説を始め。古説と思ふ。なし。條くも少かるべ。やとは。人各々本命行年ハ天命を定れるを。偶ハ時命の変を



知む為ハ。筮を立ゑる義分るなと。既ハ本編ハ委曲せるを。考ハ合ちなし。抑旅卦を。所住を去て處ハ旅の象ハて。其好む禮樂ハも。聖智あるとも位无き。東西南北の人ハて。行を得ぬじき道分る由を。商瞿ハ問ハて之を解る。其天命を。何とも為ぬ。なるべ事を嘆じて。其より見を改めて。禮書を讀ちやを停廃し。春秋ハ史削ハ止まり。五十ハ齢ハし。て。始ハて易を究ハて。十翼を作れる由分り。然まだ史記。自序ハ。孔子曰。我欲載之空言。不如見之行事之深切著明也。と有るを。史削ハ就て云へる語。まく。説苑ハ。孔子曰。成人之行達乎情性之理通乎物類之変知幽明之故賭遊氣之源若此而可謂成人既知天道行躬以行義飾身以礼樂夫礼礼樂成人之行也窮神知化德之盛也。有ハ易学ハ就ての語と聞ゆ。なを思ハる。此も共ハ。五十而知天命より後の語分るなし。然まだ古

そ毎に替りて、其の旨い
と高尚に聞えあり)。十翼ゆえに本文に序、彖繫象説卦文言
とあり。彖傳上下。繫辞上下。象傳上下。説卦文言の八傳に序、
卦雜卦の二篇を加へて。十翼と云ふ。史記に孔子序卦雜卦の
名を漏せり。序とは。孔子以前よりの在りし。右の傳等を撫し
聚め。序次を立て。十傳と為せる由なり。漢書藝文志に易經
十二篇と有り師古
注に上下經及び十翼故に十二篇と云ふ孔穎達が正義に十翼、
者。上彖一。下彖二。上象三。下象四。上繫五。下繫六。文言七。説卦
八。序卦九。雜卦十とあり。此を然る言なれど。楊雄曰。宓犧氏
經緯天地。經以八卦。文王附六爻。孔子錯其彖而彖其辞と云へ
り。文王以下の説も非なり。然るに階志に。孔子為彖象繫辞文言序卦。説
卦。雜卦と記し。今は坤鑿度にも。孔子作十翼と云ふ。諸書に。
十翼の文を引用せるに。孔子曰など云ふは。悉誤なり。序と



云へるに。豈うち任せて作と云むや。然るに漢以來。誰も。十翼
も無く。唯に孔子の作なりと云へる。歐陽脩が周易童
子問と。伊藤長胤が讀易私説とのみ。然れども。其の未だ尽さ
ぬ説ども多かれど。其を見るべし。偖また序次を為むと喜み讀め
に。韋編を三たび絶損せるほど。心に應ふ如く。序を為得ざる
し故に。あむ我に數年の假ありて。是の若く勞なれば。我が
易學に於て彬々ならむや。意に快からぬ由を嘆きしなり。
孔子の易を叙せるに。甚く労せる事は。論語緯比考讖にも。
孔子讀易韋編三絶。鐵樵三折。漆書三滅とも見えあり。史記
の文と是に依りて上に坤鑿度に。孔子の易学は。姬昌を師
とし。姬旦に法とせり。有孔に就て思ふに。尚書の孔安國が
序に。古へ者伏犧氏之王天下也。始畫八卦。八卦之説謂之八索

求其義也。先君孔子生於周末讃易道以黙八索と有る八索を。本編に云へる如く。本命行年は八卦。各々年々に八索して。八々六十四卦と成る。それ六十四卦。まゝ毎年は八節に変化して。六十有四爻成る古法なり。それは此文の正義に。易八十四爻皆出於八卦。八卦就八卦。求其理。則萬有一千五百二十策天下之事得。故謂之索。非一索再索而已。とあるにも知られし。然るに孔子かは姫昌父子が。六爻判断は周易を讃して。八索は古法なれ廃黙せる由なり。其を論語に。信じて古を好むと言へる語も有れど。其性元より古道を好むに。常道を好む学癖あまた。此を学ふはじき非事にもそ。かく言ふを不審み思はむ人も。後に問へ答へ為べし。

扨て其序次は上下と云ふ十翼の中に。彖傳上下は。姫昌が彖辞の傳。象傳上下は。姫旦が爻辞の傳なり。其彖爻の辞をも。採用られ上を。況て其傳を云ふも更なり。彼彖傳は。實に孔子の自作にやと思ふ由あり。其を大哉乾元。萬物資始。至哉坤元。萬物資生。など様の讃語多れが。讃易道と有れに叶へり。かゝれ湯武られ擬聖に。善を誕ある説は有れが。此人の学風に合ずなり。湯武らに善を誕多りとは。彼革卦は傳に。渠らが君を放ち。君を弑せる事をし。順天應人と云ふ類を云ふ。ちゝ論語を始め諸書に。此人の成湯文武らに。善を誕多く語を。數ふるに暇あり。次に象傳上下。是は彖傳と同口氣なれとも。孔子は作なる故に所思ある中に。大象は乾に天行。乾君子以自彊不息と云ふ。坤に地勢坤。

君子以厚德載物と云ふ類の六十四章なり。疑ふらく太昊氏以來は象辭を。轉傳口誦し來れる故。いまだ古記世に筆記せざる物なり。其も姬昌が象辭の危厲なるとも。似も著き温雅なる文なりて。法象を云ふ古易簡なりして。其趣意の善く諦なる通ふ。かの象文は文等の。謎を解くが如き類なるべし。質直平和の文なる故以て。古象辭の遺訓なるなと先所知なり。いで其由は。まだ彼六十四章を。大象と云ふなり。一卦は大象なる云ふ文なる故の名なるが。謂ゆる象傳中に。錯出せる由來いかに也。誓ふ所に。姬昌かは彖辭を作りて。卦々の下に載し。姬旦又爻辭を作りる後なり。其周易れみを用ひし故に。大象の辭の古なるも。自然に廢れぬる故。孔子は象傳上下篇を作る時しも。其を惜しみて。彼象傳の每首章に標し



出せる物と見えなり。然るに彼象傳は。爻辭を釈せる傳なれども。爻傳と號くべき所に象傳と号けしは。其首章に標出せる大象の文を。配く象と唱へ來れるを。思ひ合べき所なり。然らば此大象の。孔子以前に在りし古文なりと云ふなり。何を以て知ると言ふに。春秋昭公の二年は左傳に。晉は韓宣子が魯に來聘せる時は事を載して。觀書於大史氏見易象曰。吾乃知周公之德與周之所以王也。と有り易象とは。乃古は大象は文を見る義なり。今は謂ゆる姬旦が爻辭。及び其傳を謂ふなり非ず。但し是訳に。吾乃知周公之德與周之所以王也と云ふは。大象辭の温柔なるを。危厲なる義なるが。此を周公が作と思ふ撰なるは非なり。然れば伊藤長胤が周易通解なるも。今と相似なる說を出し

て。右の左傳を引き。孔子時年十歳。象之作蓋在孔子之先矣。と云へれど。信然る說なり。はく後の人それ讀易私說を見るべき子所觀象者為指爻辭然先儒以十翼為孔子之作故以解宣夫皆能言之載在左氏傳晉獻公嫁伯姬于秦史蘇占之引歸妹之卦也襄二十五年齊崔武子筮取棠姜陳文子引困于石入于蒺藜之辭可見爻辭於諸国久矣何得謂下到宣子始觀之哉と云るも是も通えがたき說なり。然らば此大象辭。かの周易あるし後の物かと言ふか。夫よりは遥かに以前の物なり。其を何を以て云ふまで。本編中註せる如く。象字もと南越の大獸の名なる。想像の義を假借せるなり。八卦は作れる當昔遠らず思せより。用けむと所思の体文字おきど。象は然らず。此を疑ふ。姫昌が。其作まる卦辭は

名を。始めて假まる名と聞え多り。然云ふ軽た。能ある古書より外を。形容を擬まる事なれど。象と云ふ言を二ッなを有て來まる故なれども。普ふく形容の義を用ゐ辨ふなきなり。抑象字は。說文に象。豕走也。从彑从豕省。韻會に。徐曰象形。繫辭曰。象者材也。謂卦中剛柔之材。陸氏曰。象者斷也。毛氏曰。从彑彑頭也。象其鋭而上見と見え。楊慎が外集に。象亦曰芽犀狀如犀而小角。善知吉凶。交廣有之。土人名曰狶神。犀形獨角。知幾知祥。是則象者取其幾也と言ふ。また留青日札に。象者修豪之獸。豕類也。頭鋭而上見。故象居卦之首。豕走斷然不疑。故象能決斷一卦之體。或曰象名芽犀。形小獨角。善知吉凶。故曰狶神。出于南荒とも言ふ。是等の說に依れば。旧來の大象に。象字を假借せる說に思ふ著て。此獸の名を借りて。己が新

作せり。辞は名ずけたる為なるのみ。然れど假令象と名けたるも。語ちて革まる。その卦徳の大體を云へたる。即象辞なるが故なり。繫辞傳にいへり。彖者言乎象者也とも見えたり。是何ぞ大象は彖辞より古記明證なるべしや。長孚が通解に。先子謂象別就上下二象取義如天行健地勢坤然則象之作其在於彖之後乎と云へるも。深く右の謂を思はざるのみ。然らば大象も。殷世の辞なるのみにして言ふ。尚夫れのみも以前は物なり。其れ何を以て云ふまでか。殷は用ゐる歸藏易の卦名なり。既に云ふ如く。今は卦名ずけたる大抵異なるまでか。大象辞ゑし殷世に記さむ。其れ卦名を用ふべきに。然らざるべし。決めて夏世の筆記なり。上の第四條に引ける路史の説に。連山之文歸藏之文湯代之作周易之文文王

之作と有るも思ひ合せ。其れ夏に用ゐる連山易なり。今は卦名と全同じ記に。大象の卦名に。その用ゐるを以て著明なるが上に。その六十四章の文に。君を大人と稱し。或は后とも先王とも稱せるを以て。疑なく夏世の筆記なるを推量られる。大象の文。凡て六十有四章の中に。七章は先王と称し。一章は大人と称せり。其餘の五十四章は后と称し。一章は大人と称せり。其餘の五十四章は君子と云ひ大人とも云ふ。是を以て其世を量るべし。然らば君子と云ふ大人とも云ふは。赤縣太古傳に云へる如く。皇國の故實より起りて。大昊氏の當昔より。王侯の通稱に云ふ効ある言なるべし。大象辞の口授あるべし間は。君子とも大人とも誦し傳へるべし。夏世より後に。先王后なども云ふ語をも交

子を傳へむ。大象辭の古く口授して傳へけむ事を。既に引ける乾鑿度に伏羲氏始て八卦を作り文王質を以て天に告げ此易之意と有るを始め。數の書に其を彼大象の先さる意ばへの見えたる所にて知る所なし。其を彼大象の先王以云云と有る事業どもを視るに。多くは夏禹以前の王者の復歴を合せるを以て。夏世の筆記に疑無しとは言ふ所なり。其先王と稱せる條々は。先王以建萬國親諸侯。先王以作樂崇德。殷薦之上帝。以配祖考。先王以省方觀民設教。先王以明罰勅法。先王以至日閉關商旅不行。先王以茂對時育萬物。先王以享于帝立廟。などに見え。后と稱せる條々は。后以施命誥四方。以懿文成天地之道。輔相天地之宜。以左右民。后以施命誥四方。以繼明照于四方。などに見え。大人と云へるは。大人以繼明照于四方と見えて。此は皆禹王以前の王者の事業に係る辭等なり。偖て君子以云云と有る五十四章を視るに。これ王侯に渉る訓誡なるが。引伸しては成人の学に志を立ては。士庶にも用ふべき辭等なり。是に因りて



思ふに。孔子晩て易を學びて後は。能く古の大象を觀じ。熟く其辭を玩びて。其稚の言行なる。此辭に本づけし事著れり。抑君子といふ語は。もと右の如く重た語なる。孔子の稚て。大象に本づけて。士庶を訓ふる。君子に比て語を成せる。故に君子と云ふ言と成せる。故に君子といふ語は。輕くなりて。今しては漢語なりて。村學窮の卑人らさへに。誇りかに君子の氣どり振を免るも。傍痛き事に成て。此も孔子以來の事なりとて。論語に孔子の自ら。君子と稱せる。王侯の稱せる語の許多なるを以て知べく。實は君子とも。王侯の稱なるなり。大象の文を更なり。左傳以上の古書に熟視て。然るも論語とて。多く五十歳以後の言行なり。集記せる物と見るに。其開卷第一なる。學而篇の首章に。學而時習之不亦說乎。有朋自遠方來不亦樂乎。人不知而不慍不亦君子乎と云へるも。兌の大象に。麗澤兌君子以朋

友講習と有りゐ本ばりの語かり。然るに兌は恒ゐ悅懌を
主と為る卦なれば教ゑて、学ぶて時ゐ之を習ふを亦悅
ぶ。其学ふるやうて、学友は遠方より訪來て、講習を為ゐ朋も有りゐ。此
かり、又然しも遠方より訪來て、講習を為ゐ朋も有りゐ。此
学ぶ事を都て知らぎ。我を知る人無きを慍悶せざ
るも、亦君子は風ゐ不らぬやうに、兌卦の象を觀じ、其辭を玩
ぶて、自ら〳〵寓意せる語かり。見む人心を潛めて思ふべき
ぬ。此を始先と為て。論語中ゐ。さは信ゐも言ひ得ぬと所
思ゐる語ども。熟視れば。大象は辞を敷演し。或は翻案して
云ふが。半を過ぎて。かけ一以貫之と稱し。これ第一義と立
ふ仁と云ふも。乾坤二卦の大象より。説出ゐる物かり。是ゐ
ても。五十以学易可以無大過矣と云ひ。晩ゐして易を喜み。
韋編を三絶し。鐵擿を三折せりと云ふ説の。實然り言かゐ



を思ふ及し。論語中かる孔子の語どもゐ、大象の辞を敷演
駁き事ゐも有るど。所狹く煩ければ。別ゐ古易大象傳と斯
云ふ物を著はして。其毎章の注ゐ。引出りを見りべし。斯
て第二十堯曰篇の終章かる。不知命無以君子也と云ふ語
も。澤水困ゐ大象ゐ。澤无水困。君子以致命遂志と有りゐ本
ばけふ語ゐて。知命も易學ゐ第一義かり。其も かけ陳蔡の
間ゐ。困厄せる時の様ゐても知ぬし。此時しも子路が慍
も有やと問ひりゐ。君子固より窮ゐ。小人窮ゐまば是ゐ溢て。君子も亦窮ゐる
ると云る語を思ふべし。既ゐ論ゐ。かり君子を許せり。然て此
時ゐ。琴を鳴し歌も在りしも。易の大象ゐ因りて。然りゐ
命を致ゑ。五十ゐして。天命を知る驗ゐで有りる。然りゐ
此語を終章ゐ出し。首章ゐ。兌澤は大象ゐ據れる講習ゐ語
を出せりと。道を學ぶゐと。講習ゐ始めて。知命ゐ終る義

な明せるなり。論語は撰者と誰と知らねど。能くも孔子の
志學とめ。成學まで悉。窺ひ識る撰者なりけり。論語の撰者を有若
曾參らが門人の撰と云ひ。或は関損が弟子の撰なりと云ふ。猶くはぐれ説等あまたあり。皆詳かなる説等なり。しかて
論語なる語ども。多く大象の辞ぞ。本ぞりなりと言ふ事は。古
今の學者の知ぬ事なる。始めて言ひ出あまたあり。今
忽ち諾ふ人も有はじく。却て之が辨を作りて。大象辞と。
論語とは相似あるは。共に孔子の語なる故なりと言ふも有
むか。然れど其説立がたき由あり。其は彖辞爻辞は。姫昌父
子の作なり。互に異義あり。其を釈せる彖傳象傳は。共に孔
子の作なり。本辞と其義の違はげに中に。唯かの大象辞の



み。彖爻の辞。及び其傳と。義理の相違せるが多かるは。是の
ミ古辞なる明證なるべし。今の相背く事をし。一ツ二ツ云
君子以厚下安民と有るは。是安重の卦なり。彖辞なれ。剥々
也。柔変剛也。不利有所往と有りて。吉卦に非ず。かく履卦の
大象に。上天下沢履。君子以辨上下定民志と有りて。軽と祀
を説なるに。彖辞なれ履。柔履剛也と云るは。危厲の虞あ
る卦なり。此餘に象と象と。其旨は異なる。今尽く挙るに暇
あらず。かの彖辞爻辞を更なり。其彖傳爻傳なども。吉凶相
間せる。大象の六十四章。これ之る人事に推て。教ふるに
善道を以し。一も不善に渉る者なきは。是けに周易に関か
る事は。ゆくゆくと諦なるに非ずや。斯て後に。顧炎武が日知
録に見えむ。其一巻に。孔子論易見於論語者二章而已。曰加
我數年。五十以學易可以無大過矣。曰南人有言曰人而無恒。
不可以作巫醫。善夫不恒其德或承之羞。子曰不占而已矣。之の

意を人として恒の心なき者は巫醫たるべきのみ。其の恒卦の九四の辭に其の德を恒なさざる者は或て之が羞を承くと云へるを證として、記者は於恒の心なき者も占はざらむ而已と誡めたる也。夫子学易之言而即繼之曰。子所雅言詩書執禮皆雅言也。是知。孔子平日不言易。而其言詩書執禮者皆言易也。人苟循乎詩書執禮之常而不越焉。則自天祐之吉无不利矣。大象所言。凡其體之自施之於政者。無非用易之事。以上の說ども。古今の人の云ざる事なれども。信に然る言なり。此くの以下も繫辭傳を直ふ孔子の作と思ふるのみ非なるべし。其餘をも理を多く說なり。諸是に就て案ふに。論語に其門人らの言に夫子之文章可得聞也。子の性と天道は不可得聞也。子罕言利と命と仁とは有るも容易に云はざる事なり。故皆易道の深理に渉る事なり。故其作繫辭傳於悔吝无咎之旨特諄々焉。然辭本於象。故曰君子居則觀其象而玩其辭。觀之者淺。玩之者深。其所以與民同患者。必於辭焉著之。故曰聖人之情見乎辭。又曰出入以度。无有師保。如臨父母。是孔子之易也。也云云。予が意を得る說なり。今の要ある語ども拔摭して抄し畧。此に替へて長胤が通解及び雅言詩書執禮。乃曰。興於詩立於禮成於学。此夫子平日所為教者也。其言及于易者。僅有可以無大過之言耳。又曰。加我數年。則其事似緩。觀十翼所言易之於人道極其深奥極其切近不可斯須離。非詩書之可比。此其旨不同。吾寧捨繫辭而從論語と云。予も論語を宗とし、其父が言に從ふなり。生涯の意と為る。故なるべし。顧炎武が說に比べくも非無。然も有るべし。皇国の儒者に此人ほど精学なる者無しかば。此人の說のみを、あく往々に論らふ。其餘は大ざっぱに論らふにも足らざるかし。巧て繫辭と以下は諸篇なり。孔子の作なりと云ふ。漢以來宋に至るまで。異論

无ㄗし字。歐陽脩ガ周易童子問ト云フ物ヲ。童子問ニ曰。係辞ハ非聖人之作乎。曰。何獨係辞焉。文言說卦而下。皆非聖人之作。而衆說淆亂。亦非一人之言也。昔之學易者。雜取以資其講說。而說非一家。是以或同。或異。或是或非。然其傳已久矣。故雖有明智之士。或貪其雜博之辨。溺其富麗之辞。莫得究其所從來。而要敦其眞偽。と言ひて。はゞ其繁衍叢脞ヲ依數說ヲ出し。其一ニ乾の初九ヲ潛龍勿用。と有ルヲ。文言ハ潛之為言隱而未見。と云ひ。其二ニ係辞ヲ。乾以易知。坤以簡能。云々。と有リ。はゞ易簡之善配至德。云ふ。或ハ夫乾確然示人易矣。坤隤然示人簡矣云々。はゞ夫乾天下之至健也云々といひ。其三ニ同傳ヲ。六爻之動。三極之道也。と云フ。はゞ足ル字。はゞ易之為書也。有天道有人道有地道兼三才而兩之。云々と云ふ。はゞ說卦ヲも同說ヲ出し。其四ニ係辞ヲ。聖人設卦觀象繫辞焉而明吉凶。云々と有ルヲ。足ル字。



同傳ヲ。はゞ辨吉凶者存乎辞。はゞ係辞焉以斷吉凶。云々。或ハ易有四象所以示也。係辞焉所以告也。云々。はゞ設卦以尽情偽。係辞焉以尽其言。云々。凡此數說者其畧也。其餘辞雖少異。云々。はゞ有ル抔ヲ挙ル。而大旨則同者。不可以勝挙也。謂其說出於諸家。而昔之人雜取以釈經。故擇之不精。則不足怪也。謂其說出於一人。則是繁衍叢脞之言也。其遂以為聖人之作。則又大繆矣。と言ひて。次ニ亦庚相容。ざる說多し。殊ニ多カ能く論ヲ得ざる說等ヲ。但し中ニ有ル。実ニ能く論ヲ得ざる說も無キニ非ズ。斯て其下ニ。係辞者。漢初謂之易大傳也。至後漢已為係辞矣。謂之聖人之作。則僭偽之書也。蓋天使学者。知大傳為諸儒之作。而敢取其是。而捨其非。則三代之末。去聖未遠。老師名家之世学。長者先生之餘論。雜於其

間者在焉。未必无益於学也。と云へるも信然り言なり。此文は繫辞傳を漢初の易大傳と謂ふと云へるも、史記は自序の易大傳に天下一致而百慮同歸而殊途と有る正義の張晏云へる謂易繫辞也と云へる說に據りてかく言へり。經典釋文にも大史公論六家要旨引て此文を謂之易大傳班固謂孔子晚而好易讀之章編三絶而為之傳傳即十翼也と云へる前漢郊祀志に刘向が語に易大傳曰誣神者殃及三世と云へる語も有り。然るに此傳に見えざる。抑繫辞傳も。実に名家の遺說餘論を聚めし物にて。全くも孔子の語に非ず。中に大昊以來の古易の說あり。姫昌以來の周易の說あり。珠玉砂礫混淆して。其文の序次いと猥雜なるも。孔子の遺說を集めて。序を調ふむを欲せる物から。彼象象二傳の作に專と力を用ひて。此傳ばかり序次を為異にせし故。其門葉の後人。その草稿に言加へ抹して。世に傳へし物なり。是を以て其文中に。顏氏の子なども言へり。子曰を云へる條々も多かり。然れど繫辞傳も元より其新古の取舍なくて叶はぬ書なり。讀易私說に。系辞曰顏氏之子其殆庶幾乎。有不善未嘗不知。知之未嘗復行也。此非孔子之言也。礼に父前子名。君前臣名。弟子之於師亦然。故夫子之呼諸弟子。必称其名。曰參乎。曰回。曰由。曰賜。而未嘗称其字。亦未嘗称某氏之子。若使系辞為夫子之作耶。必不称顏子之子。史記載孔子之言曰。顏氏之子使爾多財。吾為爾宰者。亦依系辞附會其称焉耳。不足據也。旦翼易而称其門人之德。尤可疑也。蓋戰国儒者習聞顏子之德。掌合回也屢空及不貳過等語。以発明不遠復之義。耳と云へる。通解は釈例に十翼之興。或先於孔子。或後於孔子。後世湊合以附經耳とも言へり。実に此說等は如く繫辞文言なども若孔子の精撰なるむに。自語に子曰と云へるも非ず。是を以て說者或は。此を講師の言なりし。或は子を男子の通稱なるまで。何人を指とも。詳なるに抹も云ふ。然るに其は上件の說を思はざる非說なり。次に文言傳は。長胤も云へる如く。首

章は元者善之長也云々。故曰乾元亨利貞と云、内で六十四字を。左傳なる穆姜が語なり。斯て文辞を解し畢る後に。乾元者始而亨者也云云。雲行雨施天下平也云々云ふ六十六字あり。此は彖辞と同旨なるあて。本は文言首章は錯簡なり。是を以て。元者善之長也の章と。其旨自ら相年隔せり。然れど元者善之長也と云ふ首章は。後来の捻入なる古や明けし。歐陽脩が童子問に。早く首章の元者善之長也。と云ふ文を挙て。此穆姜之語。在襄公之九年。後十有五年。而孔子始生。又数十年而始賛易。然則四德非乾之德。文言不為孔子之言矣と云へるも然る言なり。奉ずべき。

まく是に云へて思ふに。此は三易有りし以来の古説なり。孔子の集記せるが中に。後来まく其門葉の徒なり。孔子の遺



説。はまく左傳中の語をも加へて。撰次せる物なる事疑なし。然るに童子問に。首章は元者善之長也云々の語を。向に。孔子以前の物と云ふ説を奏らば。

或謂左氏之傳春秋也。竊取孔子文言以上附穆姜之説。是左氏之過也。然乎。曰不然。彼左氏者胡為而傳春秋。豈不欲其書之信於世也。乃以孔子晚而所著之書為孔子未生之前之説也。此鍾基愚者之不為也云云。とも言へり。此説は能く叶へる。

次に説卦傳は。階は經籍志に。秦焚書周易獨以筮得存。唯失説卦三篇。後河内女子得之。と有れど。今唯一篇あり。其ならら玉磎相半して。全篇そは。仍ほ用ひ難き物なり。清の毛奇齡が易小帖に。説卦在漢時已亡。至孝宣時。河内女子発老屋得之。至後漢荀爽集解。又得八卦逸義三十有一。今諸家所傳則皆逸義也。此非可意造者。故朱氏本義已補入。荀氏集解于説卦傳下。と云へるをも思ひ合せべし。其採用ひ

き條々は。昔者聖人之作易也。と云ふ二章。天地定位の章。雷以動之の章。乾健也。坤順也の章。乾天也故称乎父の章。など科玉條なも比すべき物なり。其を本篇に註せるを視て知べし。其餘は數章を。みれ蕪雜猥瑣なるが中に。帝出乎震と云ふ章を。既に云ふ如く。姬昌が偽方位の說なきを。故曰成言乎艮と云ふ段で。一切に掃除を加へて。擇び用ふべき事も無よふ非らず。朱熹が本義に。此篇の。乾為天為圜為君為父。坤為地為母為牛為子為釜為吝嗇と云ふ段で。此章度八卦之象其間多不可曉者。求之於經亦不盡合也と云ふを。長胤が通解なも。此章を評して。考諸經及象象之間或見或不見至於旁取庶物則煩猥鄙瑣多不可曉者蓋前世筮史之所傳解類而敷衍焉耳。以此為夫子之所作則吾所未悉と云ふを。信なる然る訳ななを。次に序卦傳を。六十四卦の叙を論じ。大象辞を相含みて。說を為なる物なるが。早く王弼が弟子らの言ふ。序卦非易之緼と云ふを。序卦非聖人之書。とも云ふが如く。信用に足ざるなり。長胤が通解及び私說に。論辨せる事なきで。今更に云はず。朱熹が本義に。此篇は。一字の註なも下けず。此に思ふ旨有るを。し事なるを。然まど中に。卦名を釈なる說なども。焼き取べき事も無きにも非らず。次に雜卦傳を。六十四卦を。会易反對相偶して。叙を為し。相雜て說を為せる故に。雜卦と云ふ。此を彼童子問及び。讀易私說に云ふ如く。筮家の占書と見るが。周易上下篇なりを。却て古說なる様。取收なる物と見え。是を以て採用して。大象の不足な

補ふべき語も少々〻あり。借かく思し續くまで。十翼を。これ孔子の自作なりと云ふて非なる事。もし、絶て孔子の手を經し物を非ずと云ふを。深く思はざる繆なる事を辨ずるなり。古今偽書考と云ふ物ハ。宋王景開祖儒志編に曰。或曰。易繫辞果非聖人之言乎。曰。其原出于孔子。而後相傳于易師。其末也遠。其傳也久。其間朱墜而增加者不能無也。と云ふまで。其ハ中に陪志ハ。孔子の十翼を為れる事を言ふ畢て。子夏為之傳と云ふ説を記し。周易二卷。卜子夏傳。殘缺。梁六卷と有まで。此も偽作なるなり。

下卷ハ論ふを視て知るべし。

自魯商瞿子木受易孔子。以授魯橋庇子庸。子庸授江東馯臂子弓。子弓授燕周醜子家。子家授東武孫虞子乘。子乘授齊田河子



壯及秦禁學易為筮卜之書。獨不禁。故傳受者不絶也。

此第十條は前漢書の儒林傳を採れり。史記の仲尼弟子列傳ハ。商瞿魯人字子木。少孔子二十九歲。孔子傳易於瞿。瞿傳楚人馯臂子弘。弘傳江東人矯子庸疵。疵傳燕人周子家豎。豎傳淳于人光子乘。乘傳齊人田子莊何。云々と有り。猶孔子より田河に至りて。七世ハ傳來なり。凡て此徒の傳記は。史記と漢書ハ。右ハ如く載せる耶。ハて。他書に所見なし。中に子弓が事は。史記正義ハ。師古云。馯姓也。漢書及荀卿子皆云字子弓。作弘蓋誤也。應劭云。子弓子夏門人とあり。信ふも子弓は荀卿が師なりと聞えて。其著せる荀子の書ハ。聖人を語るまで孔子子弓と称せり。其書ハ就て見るべし。及秦禁學云々は。始皇本紀に。其世ハ儒者ともに。古を以て今を非なるが多くなる故に。

博士官なる者は。詩書悉藏せるを。皆取て燒し。醫藥卜筮種樹の書はみな去ず。斯て其禁を犯せる儒者。四百六十餘人を。生ながら坑に埋て。殺せりと。有る時を云ふ。漢書の儒林傳師古が注に。其坑の所。さゝ埋めるる事も委しく見えたり。始皇が此挙を。徒に謂あき悪逆なりとせ々に誹るとぞ。実に子細有りし事なり。其を西籍慨論に云ふを見るべし。扨て商瞿が易。史記漢書に。かく孔子に。易傳を受ぬと有りを。易緯坤鑿度は傳へは。此と甚く異なして。前條に注せる如く。孔子生不知易。偶筮其命得旅。請益於商瞿。曰。子有聖智而無位。孔子涖而曰。天也命也。鳳鳥不來。河無圖。至嗚呼天命之也。云々之有て。是より後。五十の齢にして。易を究めみる由を載せむ。易學に於ては。商瞿卻て。孔子より先進なる故。灼く。史記に易緯と。其說の是非を決し難し。故に二方を考へはに。先史記を捨て。易緯を取むにも。商瞿は。孔子に。易學を道すけり師にはて有る。弟子に非ざる故。強て其弟子傳に出せりと言はむ。其は史記の孔子世家に。弟子蓋三千焉。身通六藝者七十有二人と有るを。三千人は更なり。六藝に通ずる者七十有二人と云ふも。実事には非ず。然るに彼弟子列傳なる三十五人は。史遷が文に。聞見て書傳と云りを。能く視るべし。顏路。公伯僚を始め。弟子なりとは者も。數人有りて。商瞿も其中に入るを。總て十人計りも。信らるべき名字あり。況て其下に挙ある四十二人は。已に史遷も。不見書傳とて。只其名字をけを列せり。然て家語の七十二弟子解は。史記の弟子傳を取る事。疑ひ無れど。人名互に出入ありて。史記に疑はしく思はる。公伯僚が類を省きり。然るを史記の弟子傳は。強て七十餘人の數を得むとて。謾に。諸書より給ひ集めるる名にて有りを。然るを

は商瞿も、実て易学の師なりしを、弟子列に取らるゝも亦知ぬ〻なり。其て孔子世家に顔濁鄒を受業の門人と称し、後の文翁孔廟図と云ふ物にて、林放・蘧伯玉を入りて、七十二人の数を合せるなりを思ふ多し。実に三千の弟子有むむに、七十二人に、然しも事缺乏くも非ざりし。抑三千と云ふ数を、宮女三千・威儀三千などと云ふ類しに、千の大数多云ふ時の語、七十有二と云ふ数もとハ節に数きる八卦に、六十四卦を合せて、七十二卦なるに、年中の七十二候に配せるより起りて、五十を多く過ぎ、百に多く足ざる数を云ふ時の語にて、女媧氏七十二変化と云ひ、神農七十二毒に当ると云ひ、伊尹が湯に七十二説化と言ひ、或て七十二国に周流すと云ひ、或て七十二戦すと云ひ、或て漢高祖が股に七十二の黒子ありと云ふ類しに、孔子の弟子の七十人ばかり有りしと云ふ事なり。然て云ふ事、実事なりと云ひ、或て必ず三四十人の弟子有りしなり。推て七十二弟子と云ふ事なり知べし。然るに、ちなみに宿れる顔濁鄒・蘧伯玉・或て、林放・公伯僚などなさるに、拾ひ牧きて、強て七十有餘人を挙げるに、何ぞ可笑き事なるらずや。然るに、商瞿なる弟子と云ふ事も、疑はしき事なり。はた〻、或て今は本文なり。史記の説を助けて。

易緯と和會して、説を為ひむに。孔子そは易学て。商瞿にて、も後進にて。此学に入れる頃にて。益を商瞿に請ける事も有ると。固より師徳秀文相兼ねる人なり。故に。其晩学に慨み。韋編三絶。鐵擿三折して大に中学に。終に却て。商瞿に其道を傳ふる計にて精学に至まりて言むか。其て師の知弟子の能く知る有りて。却て其事を。弟子より師に厚ふる類にも。常有る事なり。人て知らぬ。己て其本弟子より習に得て。後に却て。己其道に精く成りて。其弟子に教へ返せる事も少からぬ。故今て我が身の然る事実より思に相して。かく云ふなり。右二説はいづれも。見む人擇びて用ふべし。今人の情に適はむて。必ず後の説なるべし。然てしし此考に当て。なむ。十翼て。前に孔子の序にて。なるし稿に。商瞿が受て。それ己

が説なも加へし故ゐ。子曰わど云ふ語。ナ〳〵顔氏之子わどと云、孔語も有ル。此を後人わ不能く考ふ故し。家語の七十二弟子解ゐる商瞿ゲ傳ゐ、特妬易孔子傳之志、言とあり。此説を借用し正くと、志と、十翼わどなる云ふゐも有ツべし。隋書わ經籍志ゐ。孔子わ十翼を為ツ〳〵事を記し畢て。子夏為ル之傳と云ふわ説を記し。周易二巻。卜子夏傳殘缺梁六巻と牽ゐり。然まど漢書わ藝文志ゐ。此目わく。後ゐ傳〳〵十巻わ偽書わる由も。古人既く辨ゐ如。そは古今偽書考ゐ、子夏易傳漢志無。隋志始有子夏易二巻。崇文總目曰、此書篇第略依王弼式決非子夏之文。其言近而不篤。然学者尚異頗傳習之。晁子止公武讀書志曰、景迂云、張弧偽作。陳直齋曰、隋唐時久殘缺。宋安得有十巻。陸氏釈文所引隋子夏易傳。今本皆無之。豈直非漢世書。俗非隋唐之書。抑子夏は。孔門の謂ゆる十哲わ一人ゐて。

卜商字子夏と云もし人わるゐ。此人わ。易学を傳ゐしと云古と。諦わ〳〵所見わし。劉向説苑の敬慎篇ゐ。孔子讀易至於損益則喟然而歎。子夏避席而問曰。夫子何為歎。孔子曰。夫自損者益。自益者缺。吾是以歎也云々とて。損益の卦象ゐ托して。学者わ損益あゐ義を訓ゐしかば。子夏曰善。請終身誦之と云ゐ事ゐ載ゐまど。此ゐ易傳を受ゐゆと云ふ計ゐは事ゐ非ゐ。是ゐ以て。史記わ弟子傳ゐも。其事ゐ載さず。但し其索隱ゐ。子夏ガ文学著於四科。序詩傳易。孔子家語わ執轡篇ゐ。子夏問於孔子曰。商聞易之生人及萬物。鳥獸昆蟲各有奇偶。気分不同云々と易理ゐ述て。敢問其然乎と云ふゐ。

孔子答ふて。然り吾昔聞諸老聃。亦如汝之言。と云。此説有て。易を精しき趣なまじ。此を大戴禮に據るなり。孔子は語なて。子夏なを非ず。たべを今傳は孔子家語を。礼記の諸篇及び大戴礼。さ〳〵劉向が新序。説苑などを出さ〳〵説ども。或を他書さりも。孔子の語を拾ふて。魏の王肅が偽作せる書なまじ。此説を。大戴礼を取りて。翻案せる説なや有ら。偖かく彼此を推て考ふるなり。子夏が易を傳せりと云ふ説を。商瞿が事實を謬れるを非ざるか。其を商瞿字子木と云ふ。卜商字子夏と云ふ名字は。ちゞ相似たる故も思ふべきかゆめ。

漢初傳易者有田何。何授丁寛。々授田王孫。王孫授沛人施讎。東海孟喜。琅邪梁丘賀。由是有施孟梁丘之學。又有東郡京房。自云受易於梁國焦延壽。別爲京氏學。嘗曰立後罷。

此第十一條を。隋書は經籍志を採まり。然るなり。此をも亦漢書を據れる説なり。其を儒林傳を。漢興田何授東武王同子中。雒陽周王孫。丁寛。齊服生。皆著易傳數篇。師古曰。田生授王同。周王孫。丁寛。服生四人。而四人皆著易傳也。子中。王同字也。藝文志を。周氏易傳二篇。註を。字。王孫也。服氏二篇の注を。名。同。丁。服光。王氏二篇の注を。名。寛と見えたり。同授淄川楊何。何字。叔元。元光中。徵爲太中大夫。藝文志を。楊子二篇の註を。名。何字。叔元。菑川人とあり。齊。即墨成至城陽相。師古曰。即墨名。成。廣川孟但爲太子門大夫。魯周霸。莒衡胡。師古曰。莒人姓。衡名。胡也。臨淄主父偃。皆以易至大官。要言易者本之田何。史記の儒林傳を同説なり。終を。要言易者本於楊何之家と有り。古を漢書を正と為べし。丁寛字子襄梁人

也。從田何受易精敏學成東帰。何謂門人曰。易以東矣。師古曰。言丁寛得其法術以去。寛至雒陽復從周王孫受古義。號周氏傳。作易說三萬言。訓故挙大誼而已。師古曰。故謂經之吉趣也。它皆類此。今小章句是也。寛授同郡田王孫王孫授施讎孟喜梁丘賀。繇是易有施孟梁丘之学。師古曰。繇與由同。後類此。施讎字長卿沛人也。為童子從田王孫受易與孟喜梁丘賀並為門人。謙讓常稱学廃不教授。及梁丘賀為少府事多。迺遣子臨門人張禹等從讎問。讎自匿不肯見。賀固請不得已。乃授臨等。於是賀薦讎結髮事師數十年。賀不能及。詔拜讎為博士云云。此下多載其門人出為諸人の易学の繇由なる事ども。仮載ふまじ。其も略して抄さべし。○梁丘賀字長翁。琅邪人也。以能心計為武騎從太中



大夫京房受易。房者淄川楊何弟子也。師古曰。自別一京房。非焦延寿弟子為課史法者。或書字誤耳。房出為齊郡太守。賀更事田王孫宣帝時聞京房為易明。求其門人得賀。賀時為都司空令。以筮有應。繇是迺幸為太中大夫給事中。至少府。為人小心周密。上信重之。年老終官云々。此下其子及び門人らも易学ふ由りて官位至る事ども載せまど。其も抄さる。○孟喜字長卿。東海蘭陵人也。父號孟卿。師古曰。時人以卿呼之者言公矣。孟卿以禮經多春秋煩雜。乃使喜從田王孫受易。孟卿が傳。別に儒林傳中に出ふ。喜好自稱誉。得易家候会易災変書。詐言師田生且死時枕喜傳。同門梁丘賀疏通證明之。日。田生絶於施讎乎。中時喜帰東海。安得此事。師古曰。同門同師学者也。疏通猶言分別也。證明明其偽也。博士缺。衆人薦喜。上聞改

師法遂不用喜々授同郡白光少子沛翟牧子況皆為博士藝文志ニ章句施孟梁丘氏各二篇ト有リ並ニ易傳ヲ云ヘリ○又有東郡京房云云ト京房列傳ニ京房字君明東郡頓丘人也治易事梁人焦延壽延壽字贛其字名贛貧賤以好學得幸梁王王共其資用令極意学既成為都史察舉補小黄令以候司先知姦邪盗賊不得発師古曰以其常先知姦邪故欲為盗賊者不敢起発卒於小黄贛常曰得我道以亡身者京生也其說長於災変分六十卦更直日用事以風雨寒温為候孟康曰分卦直日之法一爻主一日六十四卦為三百六十日餘四卦震離兌坎為方伯監司之官所以震離兌坎者是二至二分用事之日又是四時各專主之氣各卦主時其占法各以其日觀其善惡也師古曰更工衡反各有占驗房用之尤精好鍾律知音聲初元四年以孝廉為郎云々初元

を昭帝が年号かり此間ハ京房が一世の履歴そのほ譜誌ハ遇ハすでの記事有るとど畧し申ス房本姓李推律自定為京氏死時年四十一儒林傳ニ京房受易梁人焦延壽延壽云嘗從孟喜問易會喜死房以為延壽易即孟氏学翟牧白生不肯皆曰非也至成帝時劉向校書考易說以為諸易家說皆祖田何楊何丁寛唯京氏為異黨焦延壽獨得隱士之說託之孟氏不相與同房以明災異得幸為石顯所譖誅自有傳ニ京房列傳を云ふ房授東海殷嘉河東姚平河南乗弘皆為郎博士繇是易有京氏之学と云ふ已藝文志ニ孟氏京房六十六篇五鹿充宗略說三篇京氏殷易十二篇と有リ註ニ嘉東海人為博士即京房所從受易者也見儒林傳及ビ劉向別録と云ふ但し傳ニハ殷嘉と云ふ也とあり孰リ是かる事を知ラず扨て今世ニ焦贛が易林ま

又京房が易傳かゝ稱ふ物傳はらて。共ふ漢魏叢書中ふ收み
ゐが。易林はちやと。王謨が跋ふ。焦贛易林四卷。通考本作十六
卷凡六十四卦変。每卦変六十四。總四千九十六首。皆為韻語。
與左氏所載漢書所載相類。今案延壽事。具漢書儒林傳及京
房傳中。而本傳及藝文志。皆不言著有易林。故或有疑為東漢
後人假託者。今按ずるふ顧炎武が日知録ふ易林疑是東漢
易林引左氏語多。又往々用漢書中事云々と。然考東觀漢記。
言もて。漢書中ゆ語ふ多く引きて論ずゆ。
孝明帝永平五年。少雨。上御雲臺自為卦遇蹇以京氏易林占
之繇曰。蝗封穴戶。天將下雨沛然。京房延壽弟子。今書蹇繇実
在震林。則在東漢之初。已用易林占驗。但未著焦氏名耳。今易林の

本文ふ按ずるふ。震林の蹇ふ。蟻封戶穴。大雨將集と有ふて。
語句やゝ異なり。何ゆる由ふ。若くも此の跋文ふ引くゆるを。
異本ふや。本漢諸易家說。皆祖田何。惟京氏為異黨。延壽獨得
隱士之說。託之孟氏。故藝文志易有孟氏京房諸篇。而焦氏之
名反不著。若隋唐志則固皆題焦贛易林也。經義考云。漢易惟
焦氏獨全。而今叢書本祇作四卷。則又不知孰為合并云。と言
ふも然ふ說ふ。ふ。其も上ゆ京房傳ふ據ふて。焦
贛が易法の趣ふ知ふ。今ゆ易林ふ考ふ。ふふ。其ノ旨甚く異ふ
ふも。此ふもと焦贛京房らが易法ならび。周代より漢ふ至
ふて。世々ゆ占者ふ傳來ゆる。八索法の繇文ふ集めし書
ふふふ。東漢の頃ふ至て。焦京ふどの易法と謬ふ來もる

物と見えあり。八索法とて、上に云ふ如く、每卦六十四変を名易法を云ふ。易林らく其趣を舒べり。然るに焦贛が易法も、上形くる京房傳の注に見えし如く、直日法なりて、災変を輙と為ちがひ、其も玉海に易卦之位震東南兌西坎北為一説十二辟卦分属十二辰為一説焦延寿為卦気直日之法合二説而一之既以八卦之震離兌坎二十四爻直四時又以十二辟卦直十二月分四十八卦為公侯卿大夫而六日七分之説生焉揚雄大玄次第乃全用焦法其八十一首蓋亦去震南兌坎而倣擬六十卦備焉。京房が易傳耳と云ふ。多くは合せても知るべし。

けだし。其書は末に附録せる。晁公武が説中に。昔魯商瞿受易孔子。五傳而至漢田何。何授丁宽。宽授田王孫。王孫授孟喜。喜授焦贛。々授京房。々授河東姚平。河南乘宏。由是易有京房之学。而傳盛矣。有瞿牧白生者。不肯京氏学曰京非孟氏学也。刘向亦疑京託之。以上も。はじめて漢書の所見なる事ども。既に出せるが如し。孟氏不知



当時為何説也。今以當時之書驗之。蓋有孟氏京房十一篇。以大異孟氏京房六十六篇。與夫京氏殷嘉十二篇。同為一家之学。則其源委孰可誣哉。此亦学者不可不知也。と云ふ。此も藝文志に。孟氏京房十一篇。まづ孟氏京房六十六篇。あゞと云ふ書は有ると云ふ。據まて。翟牧白生刘向などが。京房学は孟喜に出ぬ。と云ふ。非と為ふる説あるが。実に焦贛京房が。孟喜に出ぬ。と聞えて。同く直日法なりとしと思はるゝ。其王謨が跋にも。此説を称して。但考漢書儒林傳。有兩京房。其一為揚何弟子。梁丘賀所從受易者。其一為頓丘人受易梁人焦贛者也。未知此京房易傳孰為之也。今按五行志所引京房易傳六十八條。皆言災異。與洪範五行相應。延寿学之京房所作。易傳無疑。如五行志所引易傳。学者亦不可不参考也。と云ふが

如し。なほ此跋文、いはゆる一人の京房が〻むすと云ふ考をも記せるなど、其説凡當が〻ならざるを抄し出さず。ただ
て此易傳ふ。孔子曰。易有四易。一世二世為地易。三世四世為
人易。五世六世為天易。游魂歸魂為鬼易。鬼為繫文。財為制文。
天地為義文。福德為寶文。同氣為尊文と有ふた。謂ゆる世應
法なり。飛伏納甲五行ゆ生死を以て占ふ事た。後世謂ゆる
断易法の祖法ゆり。孔子れ易た。八索ゆ紬けて。姬昌父子が
六爻占を用ゐしかだ。其変化れ博から的故ゆ。斯の如く一
法ゆ案じ遺せるゆ。正傳の外ゆ。孟喜焦贛京房まで。傍傳し
來れる物と見えゆり。然れど此れ大人の易ゆ非ず。日者れ
易ゆり。孔子の早く此易法ゆ用ゐし事も。史記れ仲尼弟子
列傳ゆ。商瞿年長無子。其母為取室。孔子使之齊。瞿が母

請之。孔子曰。無憂。瞿年四十。後當有五丈夫子。已而果然。と有
孔子ゆの正義ゆ。中備云。魯人商瞿使向齊国。瞿年四十。今後使
行遠路。思慮恐絶無子。夫子 正月與瞿母筮。告曰。後有五丈夫
子。子貢曰。何以知。子曰卦遇大畜。艮之二世。九二。甲寅木為世。
六丑。丙子。水為應。世生外象。生象來文生。互内象。艮丙子 有
五子。一子。短命。顏回云。何以知之。内象是本子一。艮変為二。醜
三易文五。於是五子。一子短命。何以知短命。他以故也と有ふ
を視て知ふべし。然て弟子傳ゆる事実。孔子家語ゆも見え
ゆ。ただ次々條ゆ論ふ如く。隋ゆ至て唐ゆ至て。費氏の学大ゆ
ゆ用ゐられて。唐れ國學ゆた。其王弼注を立ゆふが。其れ學業
ゆ上ゆて有ま。筮ゆ京房易なぞ用ゐゆり。是を以て六
典大卜署ゆ。凡易之策四十有九と有ふ本注ゆ。用四十九筭
分而揲之。其変有四。一曰單爻。二曰析爻。三曰交爻。四曰重爻。
凡十八変而成卦。又視卦之八氣。王相囚死胎没休廢。及飛伏

世應。而使焉云云とあり。是より後の断易天機あど云ふ。洒しき易法の起れるも。皆此法の因事して。其俗法也。しかも知らざる有るも。憐むべき事なりとて。彼郝敬が讀易瑣言に。夫易聖人所以精義窮理利用安身。以崇德者也。操心制行隨時處中。惟則思占疑則思斷。卽是聖人所以無大過者。舍此無餘術矣。若夫占天測地按節數時。雖算極微塵。虛敵精神。何所用之。蓋天下唯理可御數。數不能違理。京房郭璞非不精也。而挾智用數。竟以滅身。故得其要一奇一偶。而消息已具。不得其要。雖以焦贛之四千九十六。何益于成敗之數哉。と云へるも。信に然る事なり。

漢初又有東萊費直傳易。其本皆古字。號曰古文易。以授琅邪王璜。璜授沛人高相。相以授子康及蘭陵毋將永。故費氏之學。行於人間。而未得立。

此第十二條も。隋志に。聽て前條に連續せる文なり。此徒の事も。前漢の儒林傳に。費直字長翁。東萊人也。治易為郎。至單父令。長於卦筮。亡章句。徒以彖象系辭文言十篇。解說上下經。琅邪王璜能傳之。高相沛人也。治易與費公同時。其學亦亡章句。專說災異。自言出於丁寬。傳至相。相授子康及蘭陵毋將永。康以明易為郎。永至豫章都尉。繇是易有高氏學。高費皆未嘗立於學官。と見えたり。藝文志に。漢興田何傳之。訖于宣元。有施孟梁丘京氏。列於學官。而民間有費高二家之說。宣元とは漢の宣帝

元帝字りを。費高と云費直と高相とを云ふ。劉向以中古文易經校施孟梁丘經或脱去。師古曰。中者天子之書也。言中以別於外耳。唯費氏之經與古文同とのみ。此高相が子孫。高康と云ひしも。彼王莽が時分。東郡と云ふ處に兵災の起るべき由を。豫て私語おて。衆を惑はせちふ咎を受て。斬殺せらるし者多し。抑かく会易易学に長分ふ徒。災異の事に坐して。誅を受るが多かるを。他は災異をば分ち知れども。己が身の災異をば。豫め知ざる能はざるか。然るを諺に。会易師巫が身の事を知ずと言ふを。此等は事よりの云ふにも有るべし。其を上に出せる京房。古は高康も。災異を語る咎を受けて。牢獄に囚はれ。既に命を失はむと為けるを。辛くして助かり。晉世に郭璞と云ふる人なれども。其事の云ふを殺さるき。此も齒に故ある事にあらず。

扨て後漢の儒林傳に。前書云。田何傳易授丁寛。丁寛授田王孫。王孫授沛人施讎。東海孟喜。琅邪梁丘賀。由是易有施孟梁丘之学。又東郡京房。受易於梁國焦延壽。別為京氏学。前條の本文を。此文に據て。琅邪王横為費氏学。注云。前書横作璜字。平仲。本以古字號古文易。又沛人高相傳易。授子康及蘭陵毋將永。為高氏学。施孟梁丘京氏四家。皆立博士。費高二家未得立。今は本文を。是文字取る。然るに此文。前書云とも有るべ。前書は文を。上に抄せる如く。費直が本を。中古文易と校せるに。文の同かるし由にて。其本の古文にしと云ふに非ざる字。此文に本以古字號古文易と云へるを違ふ。隋志にやげて其誤を受ふり。又費直と高相とを元より別学なるを。隋志に費直より王璜に傳ふ。王璜より高相に傳ふ

と云へるも、前後漢書を、麁畧なる見あらまし誤りなるべし。

後漢、施孟梁丘京氏、凡、四家並立、而傳者甚衆。陳元鄭衆皆傳費氏學。馬融為其傳、以授鄭玄。玄作易注。荀爽又作易傳。

此、第十三條も、隋書の經籍志に採るるが、其の後漢の儒林傳、易学者流の條の終りに、連武中范升傳、孟氏易、以授楊政。而陳元鄭衆皆傳費氏易。其後馬融亦為其傳。融授鄭玄。玄作易注。荀爽又作易傳。自是費氏興而京氏遂衰。と有るに據れり。

古の范楊陳鄭馬鄭荀七人が傳も、並に後漢書に載るが、中に馬融鄭玄、傑出の人なるが、鄭玄は馬融が弟子にて、十餘年從ひて、其国に帰らむと為る時に、馬融それ門生らに謂ひて、鄭生今去れり、吾が道東矣。と唱へし人なり。七十四歳の春、夢に孔子の霊に告げて、起起今年歳在辰、來年歳在巳。と云ふと見て、既に寤て、

識を以て之を合せて、當年に、余の終るべき事を知りて、其年の六月に至りて、七十四歳にて死なる事など、其傳に見えたり。其本しき事を、後漢書に就て見るべし。されば其、儒林傳に、注丹世傳、孟氏易、建武初為博士。作易通論七篇。とあり。建武は光武帝が世の年号なり。

観漢紀に、馬融著易解頗生異說。爽著易傳。據文象兼應含易変化之義。以十篇之文。解說經意。由是究豫之言易者。咸傳荀氏学。而馬氏亦頗行於世。と見え。隋志に、漢司空荀爽注十一卷。荀爽九家注十卷。梁有馬融注一卷。鄭玄注九卷。などと見えたり。九家の事は、玉海に序録云、荀爽九家集注十卷、不知何人所集、新録荀爽者、以為主故也。其序有荀爽、京房、馬融、鄭玄、宋衷、虞翻、陸績、姚信、翟子元、為易義注。内又有張氏、孔頴達が正義に、易緯朱氏、並不詳何人。と有て知るべし。

乾鑿度云。易一名而含三義。鄭玄依此義作易贊及易論。と有

孔如く。鄭玄は緯書を好める人にて。乾鑿度を始め。易緯は
これ其注を作なり。其に玉海に。中興書目を引いて。易緯案
隋志八卷。鄭玄注。梁九卷。舊唐志九卷。宋均注。唐志宋衷注
或引解經。今篇次具存。宋均不傳。李淑書目九卷。乾鑿度。誓覽図。
通卦驗各二卷。辨終備。是類謀。坤靈図各一卷。今三館所藏乾
鑿度。通卦驗。皆別出為二書。而易緯止有鄭氏注七卷。誓覽図
第一。辨終備第四。是類謀第五。乾元序制記第六。坤靈図第七。
二卷三卷。無標目。と載せるが如し。此は今これ全書傳はず
て。武英殿の叢書中に出
ず。抑古の易緯の書類は。周の末世。孔子の易學を入るし以
來。その傳受せる輩の。次々に記し傳へし内書と見えて。何

も作者詳ならず。中に孔語も多く有れど。信られ難き說は
殊に多く。まく中に。正しき古說も少から殆ず。孰く視て擇
び取るべき書等なる故。旧く劉向父子が七録。及び班固が藝
文志に。其目録を以て。俗に固頑なる儒者など。一向に捨
て取ざる論も有れも。凡て緯書類は。往々に其立る道に
破綻なる說等の有るが故に。諱惡ふ事なれど。其を拘ふ法
じき事なれそ。此に少し云むは。上に引る通卦驗に。象文
に。乾陸は文辭に。姬昌父子三人が履歷を繫らんと有る類
に。皆彼らが所意の破綻と成るべき秘說。將書傳ずし文等なる
に。是を以て刘向班固らは此を採らず。然れど其目録に緯
書類の目録が故に。其せに無しと思ふも。固陋心なる
其は史遷が記に出せる事実に。班固らが出せる書目に見
えざる事跡の多かるを。熟く視るべし。多くは緯書類に出る

説等多くは史遷が採撰せる多り。其を自序に
紬史記石室金匱之書と云へるを見て採撰せる多り。其を自序に
書目も藝文志に見えざるなど。漢世に在りし事を。既に始め
に桓譚が新論を引きて論ずる如く多る事を思い合せても
辨ふべき多り。猶緯書類の事も往々云ふ所あり。
赤縣太古傳にも往々云ふ所あり。まゝ経籍志に。魏代王肅王
弼並為之注。自是費氏大興。高氏遂衰。梁丘施氏高氏並亡。於
西晉。孟氏京氏有書無師。梁陳。鄭玄王弼二注列於国学。齊代。
唯傳鄭義。至隋王注盛行。鄭学浸微。今殆絶矣。とも有り。あむ
易の由來に就ても。是らに後の事も。歴史の志類を更多り。
諸書に多く見えて。少々論はまほしき事も有るなれど。易学先
生等の既く辨ずるれみ多るなれば。古易に用ひ
所為多きなり。是にて筆を閣くにかれむ。

# 伊吹能舍先生著撰書目　門人等慎記

## 古史成文　十五卷　神代部三卷刻成

此書は古事記日本紀古語拾遺風土記をもじ。諸の古書に有る所の
事實を悉く撰集めて古事記の文法に倣ひ神代より推古天皇の大
御代までを記さるし書なり。

## 古史徴　十五卷　神代部三卷開題記刻成

此書は上代の事實を一つ殆る事の三分四つをも記し傳ふて。
初學の徒なども何れに隨從せべき事を知らず。純粹の古傳を知ら
と能はざるを憂ひて。古史を撰び為るに就て。それ撰定めさる
所以を一段ごとに具に論し明めさる書殆るが其第一の卷は春夏
秋冬に分けて四卷ある。開題記と號けて皇國の古傳説は起原より
至諸祝詞日本紀古事記姓氏錄風土記令式格律は御典和名鈔古語
拾遺なども其外古ふと學びて專要なる讀ふき書等の内なる古學の見識
を精しく書著さるなり。

凡百卷計

## 古史傳

此書は鈴能屋翁の古事記傳に倣ひ右は古史成文を悉く註解し為書りて我が古道は眞意はを傳て此書に說盡されあるを。

## 古史系圖　大折本箱入　小折本帙入

上下二帖　神代部刻成

此系圖は古史の神代より推古天皇は御世までの御系を正史實錄に正し著せ侯りて俗間に在るとは甚く異あり。

## 古道太元圖說

一幅　刻成

古は古道に志ある人は必ず知らでは有まじき顯幽二ツあるに別る道理の元を自筆にて圖に著はし示さるし物なり。

## 天津祝詞考

一卷　刻成

此書は延喜式にある大祓詞は云ふも更にいとも止事なき詞なりと云ふも更に侯が其詞中に天津祝詞乃太祝詞事乎宣礼如此久乃良波云々といふ詞ありるを故大人あちは說に其天津祝詞と云ふは即大祓詞をいふと說あれど其は非りて別に其祝詞の有る由を論じ定められし書なり。

## 參考神名式

三卷

延喜式の神名式は古道の寶典なるとと云ふも更なるに印本寫本ともに誤字脫字多く唱を誤まれ殊に多くは故異本どもを以あるに校合して正きに從ひ異本は捨がさきを頭に標しまゝ此式を讀むに心得とは有まじき事どもを條々に記して附錄を爲し合せて三卷と爲られし物なり。

## 校正諸神階記

三卷

此は古く各國に國司在廳などは記し置さる神階記の有り侯を今は多く亡失して纔に數箇國殘れ侯を校正して訓を加られし物にて神典學に大有用は書なり。

## 校正逸風土記

三卷

此は出雲豐後肥前の風土記を除きて常陸風土記及び諸書に引さ侯古風土記は逸文を拾ひ集め校正して訓を加られし物あり。

## 大同本記逸文

上下卷

此書は平城天皇の大同年中に伊勢兩宮の宮人に勅ありて撰び進らし給ふる謂なり大同本記なるべし今その全書は亡なきなれど數の古書に引用して殘れる文を集記せらるし書なる故にかく號けられなり此まことに神典學に大有用の書なり

## 毎朝神拜詞記

抑本一帖　訂正再刻成

此は我がみ門生の徒に日くに必拜ませる神々まことに先祖の祭屋に白ける詞を教ヘ示さるなる所物なり

## 玉ゐぐき

十卷　二帙刻成

古は右の神拜詞記を本文とし爲し其に加へて其神々の御傳及び神拜の意得まこと先祖の祭りかたと都て世に在る人の今日の心えを講說せらるゝ其講本なる其後は上木しなる物なり

## 神字日文傳

上下卷

此書は我が皇國に元なる文字なしと云ふ故大人なる種々論じ置れなるなどと其誤なる事を辨じ十三體の神字を得て其を一體に必ず論じて上古の文字有しことを說徵しそれなり延て肥人書薩人書等の論に及び朝鮮の諺文と云ふも原は皇國の神字なる事を傳ふて後に製を改めなる事までを論辨せらるし書なり

## 疑字篇

一卷

此書は上の神字日文傳を著せる後に就て俗に有なる僞字の惑はしき限を舉て少し論辨を加ふ日文傳の附錄と爲らるし物なり

## 靈能眞柱

上下卷　刻成

此書は天地の初發の狀を十箇の圖に分かき著されし書にて皇國の萬國に上なる國なる所以を明し神祇の御功德風雨雷鳴等の本說まことに顯事幽事のわけまことに火忌の事と禍福互に往らはる所以まなる人魂の行方を論じ古道を學ぶ人必見るべき古學安心の書なり

## 赤縣太古傳

十二卷

古の書は唐土の古籍を普く探り彼國に傳はる古傳を正し稽ふて太一傳盤古傳三皇傳六皇傳太昊傳神農傳黃帝傳を爲て少昊顓頊帝嚳堯舜禹の世までの事を論註して彼國も我が皇神さちの開闢し坐る事實を明し彼國の古史籍を讀む者の木鐸と爲らるし書

ふて此書前は西蕃太古傳と号けられしを後はかく改られしより

## 志都能石屋　五巻　講釋本二巻刻成

此書は醫藥方術の原を大名牟遅少彦名神の始め給いて唐土を始め諸蕃國ふも傳へられる事おゝ皇朝及び唐土は醫道の制度梶符ふ由ふし及び方術を以て未病を治し醫藥を以て已病を治する古は道ある事おゝ醫業は人を更ある事世ゝ在る人を必醫藥方術を學ぶ傳き事おゝ古方家後世家と稱ふ療方互ふ得失ある事と目世の醫家者流は道の神仙より出ある由を知らざる故ふ醫術は知れども醫道を知らざる事を論じゝ扨人體の官能及び養生のあやまり事と讀傳き書どもは事を周は老子と晉は葛洪は傳とを註を依因ふ論じまゝ其末ゝ取總て醫道の要領を記されし書ある事

## 皇國度制考　三巻

此書をいふし事八都加八阿多八比呂あどいひし略度の本義を更あり其よ事を丈尺寸分あどの精度は出來し本を畏きや皇大神の御長より起事其尺やゞて今ふ傳へる曲尺ふて古今それ長短を訛ること無く後ふ令の御定免ありし時ふ大尺小尺を立給ひしも即これ尺ふて唐制を用ひ給へ依ふ非ざること、まゝ謂ある



吳服尺鯨尺をもじめ諸尺は沿革ふのうし古今は学者の度制を論じまる書數十部あれど一人も皇朝固有の尺を知れる者なく其論説の安ふ依よし事正史実録ふ徴して悉く論辨ふ加へ總論は末ふ人もよしかあ尾ふ於くやも我ゞ杖もやまと島根ふ立むとぞ思ふと いふ歌をよみ添られしより事

## 赤縣度制考　三巻

此書を古今の学者さらは尺度考ふ皇朝固有の尺度を論りて西土隋代は尺ふり唐代の尺ふりれど論ずるはみふ非れ依由ふ辨ずるふ於きて彼土は尺度も其原を人躰ふよ事起れるゞまゝ太昊伏羲氏馭戎の時ふよ事皇国は尺を二寸五分減じて傳へ給ひし由來まゝ殷周二代ふ殷尺周尺とて別ふ制事しらと世ふ普ねく行れ事太昊は古尺確乎とふて後漢の世まで制事しらと世ふ普ねく行れ事太昊尾て今の清代ふ至るまで凡て四十餘種の尺は出來し由來まゝ度量は事ふ於ても周代よりふて律呂は説を附會して説來れるふ於きて正こと事を得ゞ歴代樂律の沿革ふも及び必竟事る所を歴代の尺一ふも皇朝の尺ふ同じきゞ無き事を歴史及び諸書ふ折衷して論じ定められしより〇右度制考二部を屋代輪池翁の需ふ應じて撰はれし書ある

赤縣歷代尺度圖　一枚　刻成

印度藏志　二十五卷

此書は謂ゆる一切經藏を探索して天竺國の風土國初より室婆羅門
ゆ教方まゝ釋迦一代の本說佛道を作爲しゐる所以及び諸佛經一
部も釋迦の傳ふゝる眞ゆ物なく盡く後人ゆ依托ある所以まゝ其
道漢土を經て皇國ゑ傳はる室十宗ゑ分る室ゝる所以おのゝそゆ宗旨
の本意を博く佛法ゆ經論ゑ徵して論はれゐる書なり。

巫學談弊　四卷

此書は俗ゑ兩部神道と云ふ有る室此は古の奸僧ども皇國ゆ神國
ゑして佛法を信ずる人ゆ少きを信ぜしめむ欲して神道ゑ佛道
を混合し亦それゑ倣いて後人唯一神道と稱する道を作爲して儒
意ゑ混合し其ゆ古ゑ言ふこと悉く儒意佛意ゑして更ゑ神道の
眞面目ゑ非ざる事を委く古書ゑ徵して論ぜられゐる書なり室

古今妖魅考　五卷　刻成



此書は古今ゆ記錄物語書等を探索して謂ゆる天狗妖魅の種くゑ世
を亂し或は地獄極樂ゆど云ふを變現して人を惑はし或は異驗を
も見せて人ゑ信を起さしむる有趣ゆを說き且それ物等ゑ三熱
ゆ苦みと云ふ事の有る因緣まゝを具ゑ論じ徵されゐる書なり室

古今乞盜考　卷數未定

此書は源順朝臣ゆ和名鈔人倫部乞盜類の所ゑ巫覡と標して說文
巫祝女也和名加牟奈岐文字集略云覡男祝也乎乃古加牟奈岐祝祭
主讀詞也と載されゐる事を師ゆ若き程ゑは甚く非類ある事ゑ思は
れしを古く八幡大神の神託と僞りて弓削道鏡を皇位を得しめむ
と謀る惡現まゝ加茂川ゑ鹽を流して伊勢兩宮ゆ太神我が山ゑ
飛遷る室坐る由を內奏し兩宮の御策えを奪はむと謀れる神官まゝ
伊雜宮を伊勢ゆ大御神ゆ本宮なりを誣いて黑瀧の潮音といふ妖
僧と語らひ舊事大成經と云ふ妄書を作れる神奴なども事を思ひ
まゝ今世の神職ちふ徒を視るゑ多く僧徒の所爲ゑ倣いて乞盜風
なる所業を爲しまゝは師の門ゑ入りて正しき神ゆ道を聞ゆらも
唯口ゑゆみ其是を唱ふゝ其行を改めず奸曲ゑして神祇を蔑如を
旨ゑ多かるゑ近おろ順朝臣ゆ卓見ある事を悟り得て其行迹を筆
記し然る倫の魂ゆ行方をも論定して後來の神職等を誡めむと滾

く思ひ慮られある書なれば今し古人の名をこそ出さるれ今人は名を未だ出さまじ其は見直し聞直し教訓して終ふ其非を改めざらむ時に其名を書加へむを待て心搆ありとぞ定かしき

## 天柱五嶽考　上下巻

此書は漢土は五嶽を知さる人を多くれど世界の天柱五嶽を知さる人なきを慣至て世の始を天皇天上帝は此を立さる由緒なる其柱處を考へ人は其上帝と稱ふは我が伊那那岐神は御事なる由なるし印度の古籍に謂ふ須彌四洲は事を論じ因て印度に謂ふる大梵自在天王なるし帝釋天を稱ふ神の何なる神ぞと云ことまで不論じ及ばざし物なる至

## 皇國異稱考　二巻　刻成

此書は唐土は古書に扶桑國と云ひしは皇國は事なるを和漢は學者さち別國の如と論じ來れば非なる由を諸書に徵して論定しに於彼國初て出さる三皇伏羲女媧氏など云ふも其扶桑國なり渡れる由なれも即我が皇神なちなる事は大概を論じおし扶桑といふは櫻なる事まなる因て倭國君子國日本國若木國大八國なぞ云ふ國號のまとをも考へ記されし物なり

## 三神山考　一巻

三神山とは蓬萊瀛洲方丈を云ふまと普く人の知れるが如し然れ此も唐土は東方海中に在るなし彼國は古書に見ゆまど其は何處ぞを云ことと詳ならざるし諸書に徵して我が神典なる海神宮なる由を委く考へ因て神仙の幽境海市山市など事まる浦嶼子が事にも論じ及ばまし書なる

## 六家要指論　三巻

史記は自序中なる司馬談が六家は要指を論へる條くを本文に取て諸書を引き於て其六家の要指を委く討論せられし物なり謂ふる六家とは道德儒墨法名陰易を云ふなり我が大壑平先生の古學の大體を知むを欲なる者はまず此書を視て觀るべし

## 醫宗仲景考　一巻　刻成

此書は古今は醫人傷寒雜病論金匱要略方論を醫藥は祖典と尊奉なる不其撰者を張機字仲景と傳へ來られど史籍に其傳なきを遺憾に思へるに此は葛玄字孝先を云ひし眞人の寓名なる由を諸書に徵して委曲に考へ記されし物なる

## 金匱玉函經考文　二卷

此書は傷寒論と金匱要略方とは毛と一書ゐして漢土醫方書の祖ゐ依ゐと世人の皆く知る所ゐ如し然れども後人に攙入說多く未だしき徒その攙入文ゐ眩惑して其眞旨を得ざる事を歎き和漢古今の諸說をも用ふ法きは用ひ傷寒金匱ゐ併せて各ゐ章ゐ追ひ精しく論じ徵して古名ゐ復されし物ゐり。

## 金匱玉函經解　三卷

ゐは右傷寒金匱の正文を撰訂し次第を正して本文と成し病門を分ち其發揮せる說ゐ二書に有る所ゐ註ゐ折衷して分註をゐし二書ゐ足らざ依方論に千金外臺を始め他に古書ゐ散見せるゐ拾ひて附記し治療の活用を示さ為ゐる書ゐ王。

## 太昊古易傳　四卷

此書は前ゐ八卦稽疑傳と聞えしを後ゐかく改文られしゆ。抑太昊伏羲氏も、もと是扶桑本州に神眞ゐるゐ赤縣州ゐ天降して天帝の錫命河圖洛書の眞數ゐ因ゐて八卦を作れる事ゐり說を起して易威の事ゐ及び今傳える八卦に方位は先天後天ともゐ伏羲氏の定めし眞方位ゐ非ざ依事ゐ八卦ゐ各く主節ゐ王。人その生節ゐ依

王て本命の主卦定ゐること、又此ゐ為て疑ひを稽ふる筮儀の本義ゐ及び事に極みも神祇の御德を仰ぐゐ王外ゐき事までを論はれし書ゐて俗の易家に說とは大に異ゐる說等ゐ王。

## 三易由來記　上下卷

三易とは周禮ゐ謂ゐる連山歸藏周易ゐり共ゐも皆太昊氏の故易ゐ本ゐ於ける易法ゐ名ゐ和漢ゐ易學を為ゐ者蝟毛に如く其末書類は汗牛充棟と多ゐ依ゐ能く其由來の眞面目を紀し顯せる書ゐく周より今ゐ三千年來擬聖の擬易ゐ欺られて俗の日者ゐ依ゐ家相方位を說く輩ゐ皆八卦に眞方位を得知らずして愚俗を過ゐと及び周文父子ゐ周易を作れる始末ゐ孔子五十ゐして始めて易ゐ學べる以來も其語ゐ大象の辭を祖述せるゐ多き事ゐ於十翼の悉も孔子の作ゐ為ゐ事まゐ孔子より次く易學の今世までゐ傳來せる事までを論じて末ゐ河圖雜書の事ゐ始め此考ゐ附ゐ屬ゐる餘論ゐ附錄せられ一物ゐ王。

## 欽命籙　上下卷

周易の謂ゐる十翼中ゐる象傳の中ゐ散見せる天象の文六十四章は太昊氏以來の古訓に傳は王來れる物ゐ依事を悟王得て古れを抄出し諸說を折衷して注を加ゐ固く道紀を守らむ人ゐ師保無し

て父母に臨せらるゝ如く恒に其辭を玩味して其命を欽まし免む
と致錄せ度き書あり

## 上下卷

### 象易編

俗に斷易と云ふは上古の象易と云ひしを訛れる語なり此易法を
太昊の古易に本ぎて神農氏黃帝氏の立てし所謂る連山歸藏の
遺法あるを古今に其義を知れる人なく八宮納甲飛伏世應六親の
捌き形ぢ皆古法に違へる事を論辨し古曆道と左右に照應して臨
時の稽疑に便宜せられし書形ぢ

## 二卷

### 春秋命歷序考

春秋命歷序も唐土の古記緯書なるが此考も彼國の上世天地人三
皇より末つ方春秋より謂ゆる獲麟の年までの歷年を司馬貞が補史記
に凡三百二十七万六千歲凡世七万六百世と云ひ或は太昊伏羲氏
より周世に至る歲數を列子に三十餘万載ぢと云る説始め晃唐誕妄
れ説多く結く紛しと志て古今に論定せる書なき事より憤悱して
是命歷序に本ぎ諸史百家の説を一切に論弁して其實數を推索
むれば天地初めて立し天皇氏の元年より伏羲の出興せる元年に
至りて僅に二万三千一百年あり伏羲元年より天保三年に至
りて四千八百九十二年なる事の由を委曲に討論折衷して赤縣太

古傳の開闢記に準へ後來彼國の古史學を爲ぢ者の木鐸と爲られ
し書なるべし末に上の句一首下の句二首の歌を記して目本の神の
ちぶりからの道のうら人いかでひらけ得めやも日の出ぢ人ぞひ
ぶき初めの人と云ふ

## 三卷

### 三曆由來記

三曆とは謂ゆる夏殷周三代の曆を云ふ抑曆も天皇氏の元年天地
開闢の日を甲子歲は甲寅に天元と名し久しく眞曆にて行はれし
を太昊氏の眞曆に因循して始めて合朔章蔀干支紀元の規を定
め一年三百六十五日四分日の一一日三十二分一氣十五日七分の
日法及び一月二十九日九百四十分の四百九十九分の月法を立
て天常を知り長久を志す所以の曆法を傳へしを神農黃帝より唐
虞の世に經て夏代まで用ひ來りて是謂ゆる夏曆にて孔子の夏正
此四時の正不易の道也と云る如くなるが實の太昊の古曆なるを
殷代に至りて其法を用ひ改めしを殷曆と稱し周代
に至りて正朔を更あり其推法をも律數に因て八十一分日の四十
三を立て新曆に革めしを周曆と稱し其より秦を經て漢代に至り
謂ゆる所太初三統の二曆なり此は共に周法を襲用せる曆にて加く
次に沿革し來る間の事どもを史漢の歷志隋唐以前の書中より
抄錄して本文と形し傍諸書を折衷して講明しら形周の顯王ゲ

十六年まで氣朔ふ差と云こと無已しを其十七年卽ち孝安天皇四十一年己巳歲より始めて月行ふ毎三百四年ふ一日の差を生じ孝元天皇の十五年辛丑歲より始めて日躔ふ毎百二十年ふ一日の差を生じたる事までを委く發明せられたる書あり。

## 前漢歷志辨　一卷

此書は前漢の歷志ふ出せる劉歆ゞ三統歷及び譜を班固ゑ推法密要とも微眇とも稱せしと實ゑ甚ゞ僻曆あるふ憑て其引たる古書ゑ年數を杜撰ふ增減して己ゞ三統の妄說ふ誣會しいあく後世を誑惑せる物あるゑ古今ゑ學者よく其妄ゑ知る者あく和漢ふ成れ皆編年類の書等多くゑ此三統譜ゑ年數を用ひて紀年を立たる故ふ夏殷周ゑ間の年歷今ふ至りて僞說ゑ傳ふる事を憤悱して乃其ゑ三統の譜ゑ抄錄して本文と如し劉歆以前の古書ゑ參考して彼の杜撰を盡く辨論せられたる書あり。

## 夏殷周年表　一卷

此三代の紀年今ふ至りて其妄を傳ふる事ゑ職として劉歆ゞ誑惑ふ因る事あれむ上ゑ辨論ゑ著せるふ就て其眞紀年ゑ彼の擬紀年ゑを對攷して示さゞは惑はしからむと此年表を作られあるゆて上下二層ふ紀年し上層ゑ史記の本紀及び魯世家十二諸侯表ふ國表ふ倣ひて竹書紀年等ゑ合せ考へて年表し年々の冬至を古曆ふ依りて記し下層は乃その三統譜ゑ年表を連綴表して年々の冬至を三統歷ふ依りて記し上ゑ歷志辨と竝べ見て一目ふ其眞僞を解悟ゑべく物せらたし書あり。

## 太昊古曆傳　四卷

此書ゑ秦漢以前の古書等ふ太昊古曆の法ゑ散見せる章句を拔萃し聚めて本文と如し古天文地理歷數ゑ正旨及び干支ゑ起原その用法ゑも辨明して今よりゆ古往開闢ふ綱紀たて其節氣朔晦掌を指して古ゑを知て今來無窮の合朔節氣歲差も算術を用ふる事ゑ指を屈して推知るゝ神妙ゑ法を發明し撰ゞ撰日の古義ゑも悉く考明さたし書ふて俗間ふ用ふる曆類の撰時撰方ゑ書等とは大きふ異ふして俗の家相方位說ふ惑溺せる儒ゑも頓ふ解悟せしむ唐紀古傳ゑ開示せられし書あり世子ゑく今ゑ日者らゞ說を論ずる者ゑきふ非ざたども皆知ゑ足して其非を說くと云むも強言あら彥。

## 古曆日步式　二十卷

此書は太昊古曆の一氣十五日七分一日三十二分ゑ日法をもて天地開闢の天元甲子より漢元帝ゞ初元元年己ゞ崇神天皇の五十年まゞゑ節氣及び土旺をも推步して其ゑを先天日步式と名けらる。

然るに是より前孝元天皇の十五年辛丑歳より始めて毎百二十年に一日の氣差を生ぜし後來七千二百年の日歩をも古法に依りて推歩を究め循環して無窮に用ふべくかき調へ後天日歩式と為し先天と合せて かく名けられさり

## 古暦月歩式　十二巻

此書は太昊古暦は一月二十九日九百四十分日は四百九十九分の月策章蔀の法をもて月の開闔の今天保四年を距こと六千四百四十年前は日は甲子歳は甲戌ある其歳日より推歩し始めて漢元帝の初元元年我が崇神天皇は五十年癸酉歳まで三紀四千五百六十年は積月凡て五万六千四百月の大小閏月その刻分及び朔冬至は推歩を究め これを先天月歩式といふ然るに是より前孝安天皇の四十一年己巳歳より己巳毎三百四年に一日の朔差を生ぜし後來三千六百四十八年の朔策をも其古法を以て推歩を究め循環して無窮に用ふべくかき調へ先天と合せて かく名けられさり

## 春秋暦本術篇　一巻

此書は春秋命歴序考以下七部に古暦の法を微し著せるに拠きて其本術は正式を出し傍に春秋及び左氏傳ある暦日を抄録して對

攷せしめ後來春秋左傳を読む人は為に せられし物にて晉の杜預の春秋長暦安井算哲の春秋述暦あるは大きに異なる考あるが これは春秋命歴序考は附録に せらるさ

## 太昇暦旋式　一面

これは圓図は式にて最外の第一郭を二千八百八十に分さ 後天暦の氣策第二郭を九百四十に分さるは先天暦の朔策第三郭を三千七百六十に分さるは後天は朔策第四郭を九千六に分あるは先天は氣策これを各く別に其中央にわく圓式ありて其を旋回しかく算を用ひ 即時に先後古暦の氣朔を求めらるゝ捷徑の図式あり

## 弘仁歴運記考　一巻

此書は我が皇國の上古伊邪那岐伊邪那美神の御世より皇孫邇〻藝命の天降まで天神祇王代記和漢合運図帝王編年記など其外古紀年代記類に何れも數百万歳ある由の異説紛くとして一定せざ まさに邇〻藝命天降より神武天皇御世までを是歴運記に一百七十九万二千四百七十餘歳と有るに後人日本紀は神武天皇卷に も書加 されど此も荒唐なる説にて實には天降より神武天皇元年辛酉の前年まで二千四百一年にて其七十餘年は神武天皇は御

世よかゝ〳〵る其元年より是天保四年に至りて二千四百九十三年なれば其を合せては天孫降臨より四千八百九十四年なる事を是記と春秋命歴序とを照應し和漢の古書を参考して説明し彼本天降以前の歴年數まゝ推古天皇以前いまゝ漢歴を用ひゝ依上代の歴法をも考明されし書なり

## 古史年歴編　一巻

此書は自撰の古史成文に本ぢき右の命歴序考及び歴運記考に依りて天地開闢より此年數まゝ皇國は遯〳〵藝命天降元年唐土は太昊氏取戎紀元年より其年契して一紙六十年ぢゝの紀年を立て推古天皇の御世までを記しかゝ故古例に效ひて印度及び其餘の蕃國の大事をも往〳〵に載されより抑是編は古史の為に撰び上れ歴運記考は此編の為に考へ命歴序考より月歩式に至る上部は歴運記考のあめり著されさる書等あり然れど讀べき次第は必ず右の如く命歴序考より始めゝ此編に至る後き物なり

## 天朝無窮暦前編　六巻

此書は故鈴屋翁の眞暦考に皇国の上古または天地自然なる眞暦のみにて月次日次は暦法ある事なく日本書紀なる紀年暦日はいかれ

後より推當なる物なる趣に説れさ迄ど是より前に澁川春海翁は日本長暦まゝ中根元圭の皇和通暦に書紀なる暦は西土に外れき暦法にて皇国固有の古暦なる由を記せり此は互に冰炭相反する説なるに就てそれ両説を折衷して書紀なる暦法の起原は伊邪那岐大神漢名天皇氏にはじまり大国主神漢名太昊伏羲氏の合朔に調へ給ふるが其法は先天後天の別あり其先天は暦は皇国及び赤縣州にも傳へりて彼邦に謂ゆる太昊甲暦これなり漢土にはなき暦なりとは云ふべくあらず其後天暦は皇国にのみ傳はりて彼邦には始めその赤縣州にも傳へられる先天の暦法は西方の諸国にも流傳して万国の祖暦なる由まで和漢の諸書に參攷して第一巻に其諸論及びそれ暦術をも出し第二巻より第六巻までは其暦法にもて書紀の年間を考へて一千三百六十四年の紀年を拔くに書紀に某月某朔とある干支數百は有る限りを挙げて古暦法と違ひなき由を證しそれ巻末に持統天皇の御世に始めてもろこしの暦法に用ひ給へるより後の沿革及びそれ暦法ども係れる事は大要を論じてかく六巻とせられき

## 幹支字原考　一巻

此書は世に干支考として、干支の起原、および其字義を考へ著せる書等のまゝ有れど、皆その古義を盡し得ざるを、實はこれ太昊伏羲氏の作れるにて、十干は字を、もと亀甲の文より出づる象形字にて、十二支の字もそは逃より物ひて作れりと思ふ事、まゝ其字義その用をも古説を折衷して、委く攷へ明さるる書あり。

## 牛頭天王暦神辯　二巻

此の書は、世に素盞烏尊を牛頭天王と称し、また天道神と申し、櫛稲田姫命を歳徳神と称し、備後風土記に素盞烏尊の御子八柱ありとあるを、八將神と号けそを暦神と称する事も、吉備眞備公の所為なるが、是よりして、古人の妄告、巫の妖言色く起りて、今しも殊に家相の千妨方位の万忌を説く者ありて、容易にその妖説の退治しがたき所由を論ひ、故因に八所の御霊といふ崇神の列に、吉備公の入るる由來までを攷へ副られる物なり。

## 古今日契暦　初編　二編　凡五百巻

此書は、皇国の皇美麻邇く藝命の天降坐せる元年、西土は太昊伏羲氏の馭戎せる元年に當る、庚申歳の歳首、甲辰冬至より、今是天保四年癸巳歳の冬至、戊寅の日に至りて、凡て四千八百九十四年、積日百七十八万七千五百三十四日の間の日記暦あり、其の上件命歴序考、三暦由來記、古暦傳、日歩式、月歩式、歴運記考などの師説を誦ける人に、其實驗を示し、この故其年歴時節を諳て知し、免むを作れる書にて、一紙六十日の干支系をひきて、上下二層に別ち、上層にも世に頒布し賜ふ、今の寛政暦に以て、天保四年の冬至より記し始め、是より以前に施行あるし、寶暦、貞享、宜明、五紀、大衍、儀鳳、元嘉等の諸暦を、持統天皇の御世まで遡上して記し、其より以往は、日本紀の暦日にあるに、かの長暦、通暦等の書を参考し、下層には、太昊氏馭戎元年の首歳甲辰冬至より、其古暦にあるに、斗建五星の當番、八卦十二直あるを、摠て古暦朔晦大小閏月を更にあるに、用ひし限りを擧げ、上層の今暦、下層は古暦、通契して、目下に古今に用ひし限りを知し、免、且その二層は上下に、和漢古今の閏に暦道に係る異同を知し、免、且その二層は上下に、和漢古今の閏に暦道に係る事の大義に、所見に從ひて表章し、毎十年を一巻とせば、紙數六十一葉、日數三千六百六十日にて、ほゞ猶後來百六年の古暦を附せる故に、凡て五千年の暦あれど、巻數五百巻、紙數三万五百枚と成れば、彼氣差朔差は由に依て孝安天皇四十一年までを初編とし、同四十二年より以下を二編とし、猶かの古暦傳、日歩月歩の二式は旨を熟く得むに、終古の暦も、次くに作り得べく物して、子孫に遺さるゝ書あり、然て春秋命歴序考より日契暦まで、數部の書は、去寛政天保二年八月より筆を執り初めて、天保八年中までに功竟られ

し書等あり。

## 家相九説辨　三巻

此書は太田元貞號子錦城と云ひし儒者の著せる家相秘訣龍背發秘まさ九井九藏九竈九厠の訣を傳へさる書等を辨じさる書あり。抑今世に家相方位の吉凶を説く者多く俗人は是に惑ふ者は比々として多うれど師も然る徒は説は頓に論ふに足らずと捨置れさるを此元貞はも故鈴屋大人を甚く誹謗せる書をも著はし俗に儒學は大家と稱せらるゝ人あるが世俗躰の家相書を傳へて迷ふく世人を惑はせるか己こを得ず其説等を抄録し合せて辨論し因て家相方位の眞古義を述て是まゝ講明せじを得有はじ此由をも開示せらるし書あり世俗は家相説と其判断は相違せるあと是辨書を見て察知し。

## 神代系圖掛軸　一幅

## 鬼神新論　二巻

此書は俗の儒生孔子の道を学びて其意を得ず鬼神を蔑如せることを憤り論語をはじめ諸書より孔子の言行は鬼神に及べ係事ども引て徴論し和漢古今は儒生の鬼神を論じさる説ども看破して鬼神は有ある事を論さる書にて此は師の三十未満なりし時に草稿せられさる子世にもれ傳なりて見し人々き書れるが後に次く増訂を加へられしり

## 孔子聖説考　二巻

此書は前に聖知能品定と号けられしを後に加く改められさ已抑水が上世のをし言語に我が御世の事能こそ神習へ青人草習はめやと云ひ赤縣州の教にも人能く聖人君子の所業を学びて小人はもとさか勿習ひそと云へり故是教に依りて神習ひ聖習をむとするに其聖人と称し來れる人くはあるに孔子は謂ある似て非あるが數あるを童蒙は徒あど眞聖擬聖の辨別を知らじ聖人とぞ云へば謾りに尊信する者多きは甚く学道の害ある事をし憤已て孔子は言の聖人に及べ係遺語ども論語をはじめ諸書より拔萃して本文とあし一向に其説に從ひ他は古書等を引き徴して眞聖擬聖の名正しく事順に論ひ定めて後來聖学に從事する者の得門楷式とせられし物あり。

## 三五本國考　二巻

此書は皇国異称考の後編にて赤縣州の謂ある三皇五帝とも小皇国の神聖くちあるが早く彼国に渡りて蠢化は民を含養し教導し

給へる由來を彼此比れ古書実録を徴して論じ著されさる書なほど。
末ふ孔子の唐虞以前の古傳を庵さる所以れ論説あり。

## 五種類考　合本一卷

此れ扶木暘谷の考より抜きて得られし扶桑記・喬木考・兎木川考・速吸門考・姫島考れ五種ふて師れ閲覧を請へる書等なるを上條良枝の勧めるよりて三五本国考の附卷とせしなり。

## 皇典文彙　三卷　刻成

さは古事記・姓氏録・続日本紀以下五国史及び令式格・大同類聚方・古今集等の序表・まゝ和名鈔・名目抄の序など凡て漢文なる類を彙めて數本を校正し訓點を加へて古学れ楷式とせし幼童の読書本ふ定められし物なる故ゑ七行の大字本なり。

## 大祓詞再釋　正訓大祓詞　折本刻既成　二卷

此れ故鈴屋大人の後釈なるゞ上ゑ再釈出さる故ゑかく名けられさり其は此詞れ由來をはじめ高山之伊穂理・短山之伊穂理の事・また塩乃八百會の事・まさ文中ふ天津祝詞乃太祝詞事乎宣礼と云へる事などみ外後釈れ説とも大きふ異なる考ゑて未ふ其太祝詞考を附録せらるし物なほ。

## 年中神祭詞記　折本一帖

此れ古道ふ從事して神習ふ人くれ年ごとふ必ず行ふ度く思ふ除く神事どもなほ其れ正月御歳神を祭るを始め正月十二月初午の宮咲祭・まさ宅神祭・竈神祭・甲子祭・鎮魂・大祓・道饗・鎮火等れ祭・まさ七月小先祖の霊祭なほとの詞・まさ其祭式をも門人さちの請ふよりて新ゑ記されし物なほ。

## 葛僊翁文粹　附童蒙入學門　四卷

此は葛稚川の子書中ふ我ゞ古学の人も生涯学術の規則とあれ度き諸篇を抜萃校正して古れも幼童れ読書本ふ定められし物なほ。

## 古學諄辭集　前集一卷

近頃遠き国くの門人さちふ今世師の門人と偽ゆ諸国を遊歴する人多ゆる中ふ師のゆ称て物し給へる諄辞ゞもを何しても取出して自作と称して傳ふ人ども有り其を得て見れゞ師の本書をいあく誤り或れ化免改めさる中ふも非おゆく遂ふ師名字汚ゞ度き事ふ成ほ人くふは師れ正本を傳へ給ふと言。

おもされらるゝに就て今度師に請ひて其自作代作の諄辭まゝ師の電覽をこひし人々の詞をも集めて我等がかく題名せし物なり

## 三大考辯く　一卷

此は故鈴屋大人の古事記傳に附錄とせらるゝ服部中庸の三大考を藤垣内翁論破して三大考辨といふ書を著されしを更に辨じ直されらる書なり

## 天說辯く　二卷

古は故鈴屋大人の古事記傳なる天說を藤垣内翁の意を承て尾張の小林茂岳といふ人論破して天說辨といふ書を著せれどそは說却て非なる由を辨じ因に同人及び夏目甕麿など玉の眞柱を論破せるをも合せて論じ反されらる流書なり

## 五十音義訣　四卷

此書全部の趣意は縣居翁語意考の旨を祖述して五十聯音は神代より有來りて其音図は輕島宮の御世に成れるが其本位は天地泉開闢の次第に符合して初躰用令助の活用をのしかゝ其活機の次第を攷覈せるに五十音各々に自然の義ありて故に二音は〳〵重疊

されて各音の頭に於くもの五十音は〳〵にて總て二千五百言あるが此は皇国言は更なり梵唐を始め万国の音韻言語を網羅せる物にて此中に皇国に於くもの二百二十五と良行の上に於くもの二百五十とを除けば二千二十五言なる流が其本言は四百五言にて三音四音の言は更なり五音六音は言といへども皆是より轉用假借して數千万言に蔓延せる物なる事を啓發せられ儲その音色は本は全く五十なりしが後は三音を失ひて四十七音となれる事及び其音色言語の起れる由來は天地の初発の時に天皇祖神さちの其開闢の有狀を詔ひ傳へ給ひし神語に起りて宇久須都奴布牟由于流に始まる由を一行ごとに論ひ定めて古く阿邑を音の初発といひ來れる說の非を辨じ儲古言清濁の事に及びて末に中古より種々に音図ありしが遂に伊韋於袁延惠は所屬を錯り世にそを知る人無しを鈴屋宇斯に至りて其錯置を正し是より此学大きに開りて韻鏡悉曇の学者蘭学の徒まで其恩賴に依て其道を開悟せる事さて同じ古学は未輩られ書等に此学に付て見捨がたく非說あるをも辨弁して次なる皇典語彙の開題記に比せられある物にて世の語訳家の說とは大に異なり



## 万聲大統譜　一幅　刻成

此れ上件の二千五百言を五音の次第に類従して初躰用令助の活機を即時に見易く書さる譜図あるが其各音に五十言ずゝ有る者の阿行れ下に従へる拗音五言は外国言に有りて皇国にあき言れ又故此を除けば四十五言ずゝと成るが奇異に我が大国主神妻あえち漢名太昊伏羲氏の西土に傳へ給ひし大衍の数五十其用四十有五といふ河図洛書九宮の易数に自然に符合せる由を図説に著はし示されさる物にて即義訣れ大成図あり。

## 皇典語彙　巻数未定

此書は上件の二千二十五言を類に従ひて區別せれば阿加佐多那波麻夜和れ九行九章に又ひろ毎章五段まて五九四十五段あり段ごとに四十五言ずゝあるこの是をまゝ阿加阿伎阿久阿祁阿古阿佐阿志阿須阿世阿曽とやうに區れば段ごとに九條ずゝに別りて九章四十五段を通へては九く八十一條あるを本文に立おきて古事記日本紀万葉を始め皇典古書に有ゆる古言舊辞を其條ゝに彙集して注釈を加へ諸先輩の説をも折衷して古語の学問れ本經と為られし物あり世の語訳家大ろさ古書中に古語を見得て後に其の古語ある事成知るを即が此語彙に元あり吾に古語れ有ゆる限りを盈して後に古書中にその古語れ存れるものを拾へり古れ世人の支度とは大きに異なる所あり。

## 伯家學則演義　一巻

此れ神祇伯白川家れ学則の條ゝを委く注解せられある書なり。

## 立言文　一幅　刻成

此れ書は師の赤縣州の古典を考究して彼大古傳をはじめ数部の書を著されさるに付て或人其稽式を問ふるに答られさ除文ある が漢名をこそ借られ為れ実に我が古道の学問に転用しの説漢学を為ざき為にもと記されある物なり。

## 五德說　一名德行式　一幅　刻成

此は尾張人鈴木朗主の德行五類図と云ふ物に本説き猶それ類を増補訂正して人の德行を為べき式目を教示せられし書なり。

## 千嶋白浪　附地図　十巻

此れ去し文化三年に淡路志亜人の不意に我奥蝦夷に来て乱妨せ ふ事れ始末を委く聞記しは其前後戎狄どもに係れる事までを集記して後来皇国馭戎れ道辺海防禦の心得にとて著さもし物也。

## 歌道大意　二巻

此書ハ、歌と云こゝを発れる所以より、紀記万葉を始め、古へのは悉く眞歌ゝ、し故ゝ其躰自らゝ質直ゝ、しを中古ゝ頃よりして、儒佛の意を用ひて、虚飾の事多く、其風自ら卑くまさ祕事口傳種々の禁忌れど出来て、ち乃道弥く狹まり、眞ゝ宮比ゝ失せて、終ゝ技藝ゝ落ち、互ゝ虚飾の言くらぼ、る事の如くゝ、しは此道の太じき弊ゝる事を辨へ、詞ゝ當世ゝ從ふとも、古へのゝ如く、眞歌ゝ非ざれば詠出まじき由ゝ論らはれ、且歌ハ、我ゝ国ゝ大道ゝ非ず、一つの道ゝ、しバ、歌の道とゝ称、ゝ々ゝど、只ゝ打任せて、我国の道、或ハゝ、ち花鳥の道ゝ、ど云ゝ、當らざる事までを、辨へ論されゝ。

## おもゞれ草　巻數未定

おは、諸国の人くゝ、れ質問ゝ、答ゝられゝ、る條々ゝ、ゝ、ゝ、鐘ゝ、ち、も、ゞれ當るゝゝ、ゝ、ゝ、響くゝ、ち、ふ諺ゝ、る、ゝ、依て、かく号けられゝ、し。

## 氣吹舍歌文集　三巻

此ゝ師の時ゝ、ゝ、し、事ゝ、鰐れて、詠出られゝ、る歌ども、ゝ、ゝ、ゝ、由ありて人ゝ、贈られゝ、る文章、或ハ人の為ゝ、考、記られゝ、る、事、又は門人、其外れ人乃著書ゝ、添られゝ、る序文れ類を集め記せるゝ、り、猶泄さるは、次くゝ、加ふべし。

## 西籍慨論　四巻

此書ハ、皇国ゝ、漢学の始れる本縁より、漢土の謂ゆる夏殷周三代の沿革、ゝ、さ、周、世ゝ、し、儒道といふ道の興れる由ゝ、し、及び諸子れ説區區ゝ、る事、ゝ、さ、周、世以來れ学変ゝ、ゝ、宋学、古文辞家、ゝ、の得失、ゝ、さ、俗儒輩みゝ、り、ゝ、彼国を尊崇して、皇朝れ御制度ゝ、背ふ事とも、有るゝ、孔丘氏の、尊内卑外の旨ゝ、も、違ふ由までを、論ぜられし書ゝ、り。

## 出定笑語　六巻

ゝ、の書は、印度藏志全部の趣意を、見易くかき記されゝ、る物ゝ、て、初学れ輩、天竺国の風土、佛道れ大意ゝ、知るゝ、れ、此書ゝ、及、もの無し。

## 武學本論　三巻

此書ハ、皇国の武国ゝ、し、て、庶民と云へども、武を好むこと、異国ゝ、勝れゝ、る由ゝ、し、神代より、武を專、して、古の天皇命の、武を以て、世を治めまし、臣ゝ、ち、も、武心、ゝ、本とゝ、て、仕奉れる事れ、よゝ、そ、文武ゝ、車れ兩輪の如しと云ゝ、ど、皇国れ丈夫、ゝ、らむ者ゝ、武は骨髓ゝ、り、文は皮もゝ、りと心得べき事、ゝ、さ、漢土の兵学も、其原ゝ、皇朝れ皇神ゝ、ちの

傳へ坐るあれば、握機八陣の法を始め、取用ふぼき事も多うるを、皇朝の軍法に參考して、治乱を忘れ、研究べき事までを論ぜらせし書なり。

## 古道大意 講釋本 二卷 刻成

初学の徒は、見べき書も無きゆゑ、たゞ猶悟りがたく、多うるも多うる故、此書ハしも、師の口授うら説聞せ給ふを、直に移し記せ侯なれば、何なる初学の者なりとも、是ばかり心得易き物を有ること無し。我師の門に入らむ人、必まづ此書を見て古道の趣を知り辨ふべし。

右は師は三十未満の時より、六十三歳まで、草稿成りて、終に次く訂正を加へ、世に著さむとせられしも有り、猶この外に、稿成るもの數十部ありて、都ては百部に餘りぬと、其中に闇外に出と定めて、子孫に遺し傳へ、ほとせらるゝ物等も數あ侯へ、爰に其目を出き、其に別に著述書目集を名付けて、委曲に記せるもの一卷あり、就て見侯べし。なほも草案をもの去て、片成なる物もいと多うるを、其は稿成るに從ひて、追くて其目を出すべく、外年。

天保九年戊戌八月

國友恒足
河内盛征 等記

## 門人著書類

稿成して師は閲覽を經たる書のみ擧げて。

### 天滿宮御傳記略 繪入 二卷 刻成 根岸延貞

此は師の此御神は御傳を著さむの心ありて、當昔は古書ども、其御傳に用ある事ども、を抄錄し、なほ說を形し置きたる物の有を、それ中より概略を抄錄して、師は訂正を受て著せ侯物なり。

### 宮比神御傳記 石摺御神像附 一卷 刻成 石川篤記

あは師は古史傳中に、宮比神、亦名天鈿女命、大宮能賣命の御事を說れし條くの大概、さて宮比といふ言の本義をあらし、世にある人うならば常に、其神德を仰ぐべき由、まゝ其祭りたゝ及び其祝詞をも出し、師の電覽を經て著せる物なり。

### 古學二千文 一卷 刻成 生田國秀

此は師命をうけて、西土は千字文の文法に倣ひ、押韻の句をもて、天地初発の事より、神代及び人皇は御世、近く天正慶長以後までの大概を記し、それより古学の起るまでを、ことに玄儒佛易曆兵医律令歌学等は事までを、二千文に加き取り、一事ごとに自注を加へて、幼童

読書の料に作れる物なり。

## 古易大象經傳　三卷　生田國秀

古は師の前に欽命籙と号れて、草稿し始られし書なるを、後に其業を此人に委して、功竟しめ給へる物にて、師の漢文序を添られさわ。

## 彖易編　二卷　同人

此も前に師の草稿し始められる書なれを、後に其業を同人に任されし物なり。其躰裁は上の象易編は下に述るが如し。

## 春は紅葉　三卷　川崎重恭

此は去し文政十二年、大江戸に大火災有し事跡を委く記して、火を慎むべき物なる事は更なも云くば、然る時の心得にもと、世に著し示せるなり。抑大江戸の如き繁花の地にては、いかに慎むともかゝる災事、時くにる事なれど、常に其心掟なくは有ばからば。

## 鳥於乎し　一卷　同人

古は何人にか有らむ、古にうち言ちふ戯書を著して、江戸の海野、小山田、石川、岸本、屋代などいふ人々と紙せて、我が氣吹能屋翁をも甚く讒れるを、その侮りを禦ぎ、桜山子の評に寓して、論ひ直せる書なり。

## 霊は小柱　一卷　同人

此書は、石見国なる、岡熊臣ぬしより、霊は眞柱に説れさる事どもを、いにしへぞや思ひ出とて、霊の梁てふ書を記てれ、古にも是に是に答へ給へる事、師の宜ひ授け給へるまゝに、論ひ返しさる物なり。

## 八尋示　一卷　渡邊之望

古は、古事記傳に取用ひられさる、三大考の天説を、大平翁は、人の議論して、三大考辨、天説辨等は書あり。故に我師の論ひ直さまさる、三大考辨、天説辨、あり。然るに彼人々、猶も左に右に論ひて、天説辨、之辨、など云書の出来さにも、尤も無用にて、甚煩く、果し無きにぞなれば、此書を著して、其末を断切さるなり。

## 石笛記　一卷　宮内嘉長　石上鑒通

古は去し文化十三年に、師、大人の、鹿島香取の二宮に参詣なりしに、序に、銚子にもれし給ふ時しも、石笛を得給ふる事を記し、且此物は由来をも、師説に依て記せり、氣吹舍と号けられしは、古の故なり。

## 日女嶋考　一卷　刻成　小串重威

古は記傳に、此島は所在を、疑と考定られざるを、其は豊後国れる、伊波比の姫島なる由を、地理に徴して、委く考記せる物なり。

## 天柱記　五巻　佐藤信淵

此書は天文地理歴数に係れる事を講明せる書なるが、かく名けし故ゝ、まだ世に生ぜ出さる物の始元ハ、天日にて、其天日に御柱を築立給ひて、天の中央に位せ給ふ是を天柱と云ふ是よりして大地及び月夜見をはじめ、謂ゆる五星二十八宿恒星に至るまで悉く生出て、今仰見る如く各く運動を為る事あるが、これ生出さる所以なれも、ち天文学の起本、暦数術の根原にて、是よりぞ説出せる書なる故に、かくは名け侯、其本を知らざれば、其道を究むること能ハず、此道を辨ずるバ、天神地祇の大徳を知べからむ、我が天皇命ゝ、天の下れ大君主に坐ませば、皇国の人さらむ者ゝ、万国の事知らぞハ有ぢゝらぞ、然らざれば、世界ゝ廣きも、悉く無用の物と成る。造物主、あに然る無用の物を造り出ゆや。

## 鎔造化育論　五巻　同　人

此は、万物の製練術を講明せる書なほ、かく名けし故ゝ、天皇祖神ゝ、天地を鎔造し、万物を化生し給ふ根原の道理よりぞ、説著せる書なるぞ、世に此道を講ずる者少らぜといへども、皆その本原を知らざる故に、其理を究むる事を得ぞ、抑人世必用の諸物悉く地上よりぞ生ずるとはいへど、人工を以て製練をるに非ずれバ、其用を為さざる物多し、故、古の術を知らぜば、有ぢらぞ、是謂ゆる化育ゝ道を賛参して、少らも天地ゝ神恩に報ひ奉るゝ理なれば、なり。

## 實武一家言　巻数未定　同　人

此書ゝ、信淵が家に修ゆる所の兵学なる故に、一家言と云、抑世に兵学を称する者、数百家ありといへども、取ぢきもゝ少く、又水軍の法、数十家あれども、実用に備ふぢき物なし、今や諸蕃国、炮術大に開け、航海水軍の法、殊に詳にして、又各く覬覦の心ある時ゝ、皇国炮術水戦の法、殊に厳重に備へぞは有ぢらぜ、然るに今昇平二百餘年、干戈ゝ事、云ぢらざるが如くなれども、謂ゆる治に乱を忘れざる所にて、却て油断ぢきに非ぞ、故に只実用を主として、次く研究を加へ、縷々筆記して不虞に備へ、少らも国恩に報ひ奉らむとぞ。

## 農政本論　六巻　同　人

此は、農事の起原より、凡て此道に関る事を、委く論へる書なる故に、かく名けさゆ、抑農ゝ国の本にて、農政を善くせざれば、国富まぞ、国富ぜれバ、百事挙ること能はぞ、国家経済の道、此外にある事なし、然るバ此書ゝ、じ発に神祇ゝ御功徳を述べ、求に祭祀の粗略なるまじ、祀事までを論辨せり、○盛征ら云く、信淵著ぞ所の書、凡て四部、それ中、師説に異なる物はなく、有といへども、又以て参考に備ふぢし、と師

の許し給ふるに依て、其はゝゝに挙げるあり。

**農業餘話** 二卷 刻成 小西篤好

**農業要集** 附草木撰種録一枚揩 一卷 刻成 宮負定雄

**民家要術** 四卷 同人

**農業自得** 一卷 刻成 田村吉茂

右の書等は、各其業に心を盡して、思得さる趣を記して、日用に備ふ。且同志の人々にも示さむと、著せし物也。○盛征ら云く、右何も文章比飾なしと云へど、世、其懇切至盡せる、謂ゆる畠水練に類に非ず。

**參河國官社私考** 一卷 刻成 羽田野敬雄

官社とは、朝廷より祭らせ給ふ社を云ふ。古へは其御祭いと厳なりしを、中古ゆ、儒佛の道弘まれるに依て、神事も粗畧に成行き、終には、其名をだに知らぬまでに成さぬ。羽田野敬雄、その国の官帳を、考證を加へ、其由縁を説著し、其社々の事跡をも考明して、此書を著せる故、いとゞ餘の国々もかく古へのならはしを、

**駿河國新風土記** 卷數未定 新庄道雄

此も、正史実録に見えざる事は、更にも云も、後の物と云へども、取べきは取りて、さ今れ事躰をも、泄さず記して、最委き書なるが、全くは整はずして、道雄身まうにぬいと惜き事にこそ。

**三木一鎌** 一卷 生田國秀

おは、神祇權大副吉田殿の門徒に、三木廣隆と云人有て、中臣祓本義と云書を著せるが、神の御典に有はじ紀いとも怪し紀注釈あるを、吉田殿のいみく愛給ひて、其家の藏板と為し、普く門下の神職等に授けさまへる由あるが、其祓を、人々は左まれ右まれ、正しき神の道の太しき妨と、外国物也、あるに、止こゝを得ず、辨破しさる物あり。

**鄭子產傳** 三卷 碧川好尚

此も、左傳及び諸書に出さゆる子產の言行を集記せる物也。斯も名けぬ、此人固より、宏才博物の君子にて、国家を經綸する道に賢く、鄭に相さる事二十餘年、晉楚に恥辱を受ず、実に卿大夫さゆる者の亀鑒と、安ぶく、尤も幽冥の玄旨に通達し、鬼神の情状をも識て、其を往往国政にも施し用ひさるが、其物学は創原を、玄家黄老の道より出さる由を、毋論辨せり、師も此を、大夫則と号くべしと教られき。

**抱樸子集證** 十二卷 同人

おは、清孫星衍が、平津館叢書中に收る校正本を正書とせり。抑此書

葛仙翁の該覽博識なるゞ隨ふ諸子百家の中ゐも古傳事実の多く存せるを李善ゞ文選の注解ゐ效ひ其本文れ出所を探索して其條條ゐ徵引ゐるを肝要とし且脱誤をも補訂し所ゐ考論ゑも書を爲さゆ。かくて師れ葛仙翁文粹の注解毋この中ゐこもれ已。

## 竊慰寃魂　二巻　碧川好尚

師翁時ゝ宣給ゑく世ゐ悪逆と称ゐる人れ中ゐも実は忠誠義心の人有て非道の刑罪ゐ罹り當時ゐ其善意善行の顯れざるむいとも悲く憤ろしき事ゐ已と宣玉ハれゑ付て好尚淺見寡聞ゐれゞ母国史を始め記録物語の類よゆ其事跡の散見せるを拾集め淺見安正の靖献遺言れ躰ゐ從ひて本文を綴成し上は推古天皇の御世より始め下ハ元亨建武れ頃ゐ至れ已往ゝゐ評論ゑも加へて善を勸め悪を懲しその寃魂を慰め已むとの所為ゐれむかくは号けつ。

## 神武沿革考（武学本論附録）　二巻　同人

さは師の言ゐ皇国ゑ万国ゐ卓越さる武国ゐして神代ゑ更ゐ已人世とゐりても武を專要として国家を治め給ひしを中古よゆ儒佛の道渡已ゑ文を尊び武を卑米られしよ已乱臣賊子の多く出來る由を歎られしハ実ゐ然る事ゐるゐ就て歴史を始め軍書記録の類ゐ依ゆて神武れ道の沿革を評論ゑさるもれゐゆ。

墨阪十一代主人寫藏記